

観光地としての東京

山本光正

Tokyo as a Tourist City

はじめに

- ① 東京の案内書の刊行と東京見物
- ② 滞在型の東京見物
- ③ 東京市民の行楽
- ④ 学校関係編纂の東京・京都の案内書
おわりに

【要旨】

本稿は明治から大正にかけての東京の観光及び東京人の行楽について考察したものである。東京は江戸の時代から現代に至るまで、観光地としての側面を持ち、多くの人々が訪れているが、ここでは、観光地東京を考察するための主たる資料として、東京の案内書を利用した。

明治期の東京の案内書出版には何回かの波があった。最初は明治四年における大区小区制の実施、ついで十一年における郡区町村制に伴う東京の一五区六郡改変時、そしてもっとも多くの案内書が出版されたとみられるのが、二十二年の東海道線の開通と翌二十三年の第三回内国勸業博覧会である。明治四十年には東京勸業博覧会が開催されるが、この時東京市は大冊の『東京案内』上下二冊と、携行用の『東京遊覧案内』を出版している。なお前者は近代東京の地誌として現在も高く評価されている。以上の案内書の出版時期と一時的に多くの観光客が訪れた時期とほぼ合致している

ようだが、明治も後期になると一週間前後東京に滞在する観光客が増加した。それは地方から東京に定住した親類や、下宿した子供のところに泊まるようになったためである。さらに東海道線の開通により東京以西からの観光客も増加したであろう。

明治三十年代後半からは東京住民のための行楽案内が出版されるようになった。近世以来の行楽地は近代にも利用されたが、市街地の発展により「情緒」のないものとなり、地方からの定住者も新たな行楽地を求めだした。こうした時期に国木田独歩の『武蔵野』が発表され、大町桂月は『東京遊行記』を著している。大正期に入り田山花袋が『東京の近郊』『一日の行楽』を出版するに及んで、現在の中央線・京王線を中心とした東京西部が「武蔵野」として注目され、行楽地として発展していった。江戸の文人墨客が作り上げた行楽地に対抗するように、新しい知識人が行楽地を作り上げていったわけである。

はじめに

都市は政治・経済・文化の中心としての機能のいずれか、というよりそのすべてを有している。これらの機能を果たすための様々な施設―特に建造物―が設けられ、業務に従事する人とその家族が都市とその周辺部に集住するようになる。彼らのための行楽・遊興の場も設けられ、都市とその機能は肥大化していくが、このような都市は地方の人々にとって恰好の観光地でもあった。

観光客が観光地としての都市に期待するものは最新の建造物、巨大な建造物であり、それが官公庁の建物であれば、そこに権威・御威光の一端を垣間見ようとした。新しいモノだけではなく、長い歴史を持つ都市であればその歴史的遺産も重要な観光資源になることはいうまでもない。近世以来最大の都市は江戸・東京であり、近世には江戸城を中心に幕府の諸施設、諸大名の藩邸が立ち並び、京都には及びもつかないが見物の対象となる社寺も備えられていた。さらに江戸の人々の行楽地・遊興の場所も観光の対象になっていた。

江戸を見物するといっても何かの序でにという場合が多かったようである。伊勢参宮の途中江戸に立ち寄り、江戸を一〇二泊りで見物するというのが最も多かったとみられる。また参勤交代に随行してきた家臣や訴訟のために江戸に来た人々が長期滞在し、暇を見つけて江戸見物をしている。

明治に至って江戸は東京となり日本の首都として存続することになるが、各種機能が近世にも増して集中し、それに伴って民間の施設も東京に作られるようになり、「見物」の対象は年毎に増加していった。

大都市を手引きもなしに見て回することは困難なことであり、江戸に関する案内書が多数出版された。一枚刷りから小冊子、さらには『江戸名

所図会』のように懐中するというよりも机上で読むようなものも多数出版されている。

案内書の出版は近代に入ってからより一層盛になった。比較することなど困難だが、活版印刷が普及すると明治期だけでも膨大な東京案内が出版されたと推測される。

本稿では近代東京の案内書の変遷及び東京見物を通して観光地としての東京を見ていくと共に、東京人の行楽についてもみていきたい。^①

① 東京の案内書の刊行と東京見物

(1) 大区小区制廃止まで

江戸から東京へ、明治も維新の段階では多くの人々が物見遊山的な東京見物に訪れるという状態ではなかったであろう。このような時期にも案内書の類は出版されていたが極めて少数であったとみられる。『国立国会図書館蔵明治期刊行図書目録』^②第一巻(以下『明治期刊行図書目録』と省略)には明治期に入ってから間もなく出版されたものとして

○大和屋孝助編『御府内八十八ヶ所道しるべ』慶応元年序・明治二年跋

○『改訂東京新町鑑』大和屋喜兵衛 明治二年七月

の二点を収録している。このうち前者は地方から東京へ来た人というより、東京とその近郊の人向けに出版されたものであろう。

東京案内がある程度出版されるようになるのは明治七年以降のようである。その理由の一つとして挙げられるのが大区小区制の実施である。

大区小区制が実施されたのは明治四年十一月のことであるが、その後東京では明治六年から七年にかけて再び朱引が定められ見直しが行なわれている。大区小区制を契機として東京案内が出版されはじめるといっても、この制度が実施されて間もない頃に出版された案内書は少なく、

『明治期刊行図書目録』には明治五年の序のある『東京区分町鑑』（紅英堂）が記載されている程度である。先に述べたように出版数の多くなるのは明治七年以降のようであるが、明治七年に刊行された『東京独案内』の内容をみてみよう。

本書は和装本で巻之一、巻之二とあることから全三冊からなると思われるが、序文には次のように記されている。

（前略）先ッ第二に光彩門戸公の地名番号其他興神廃仏の名勝ところ婢女召す台に佳釀呑む楼までも空海字つけて其頭字で操出るよふ脱漏なく搜羅つもりでも迂智のあるのが大都の志るし購観の辛意あらハ焉嗎阿るを指論たまはり再四にても削加まいらせんと畢竟辺境遠陬の諸君には至極の捷便とをもふものから一寸梓に載ました企首のこゝろは此一冊を懐に志たまは、街衢にイミたまふ巡査の御方おも勞するの患なく跪居卑辞の窮屈なき豈この物にしてこの価に換さらんや。

（原本総ルビであるが、必要に応じてルビを付した。以下の引用についてと同じ。）

序文によれば本書は地方から上京した人たちのために出版されたものであり、本書を片手に気軽に東京を見て回ることができるように受け取ることができる。しかしその内容といえは官公庁をはじめとする施設等が列挙されているだけで、文章はまったく記されていない。巻一・二の目次は次の通りである。

巻之一

各省府之部・公園・植木屋・各国公使館・外国人寄留・電信局・郵便役所・会社・蒸気船問屋・廻漕・陸運会社・諸物製造・市場・神社・寺院

巻之二

皇華族之部・医師・アポテーケル・病院・種痘・馬療治・神仏・新聞紙活版所・水車・蒸気車ステーション・両替屋・牛乳卸并屠牛場

これら各項目のうち会社・諸物製造・神社・寺院・皇華族・神仏・新聞紙活版所・両替はイロハ順に配列され、序文に「空海字つけて其頭字で操出る」ようになっていいる。目次から分かるように東京「見物」を目的とした案内書として『東京独案内』を見ると、なぜこのような項目を出すのかと思うようなものばかりである。しかもその記載方法は前述のように列挙してあるだけだが、そのいくつかを挙げておこう。

各省府之部

青山御所 第三大区十三小区 元赤坂町

離宮 第三大区十三小区 元赤坂町

外国人寄留之部

英 人 エ・シリングフホルトス 第一大区二小区 大手町一丁目一番地

郵便之部

第一大区

太田金石衛門 仮役所 第一大区十三小区 両国横山町三丁目七番地

皇華族之部

イ之部

井伊直安 元掃部頭 第五大区二小区 向柳原一丁目二番地

右のような記載内容の案内書を片手に、地方から出てきた人が東京見物をしたとは思われない。序文には確かに「辺境遠陬の諸君には至極の捷便」とあり、一応地方人の上京者を対象として出版されたものである。しかし地方から東京へといっても、単に東京見物を目的とした場合と、商用や官公庁関係の用務等で上京した場合とに大別できる。『東京独案内』のような案内書はどちらかという後者の人々及び新たに東京の住民になった新東京人が主として求めたものとみられる。それに東京住民であっても大区小区制の施行により職務上このような案内書が必要とし

た場合もあったろうことを付け加えておく。

『明治期刊行図書目録』に『東京独案内』は収録されているが、本書と同様の構成と推測されるものとして『改訂東京町鑑』・『東京区分町鑑』・『東京新町鑑』が収録されている。

次に明治八年二月刊の『東京一覽』をみてみよう。本書の刊行は明治八年であるが、その内容は明治七年のものと思われる。

本書の構成も基本的には『東京独案内』と同様であるが、収録内容は詳細になっている。長文にわたるがその内容を次に掲げておくが、適宜抜粋したため前後の脈絡がない部分がある。

経緯度 緯度三十五度四十分
経度百三十九度四十分

朱引内戸数 十四万六千七百九十九戸

同 人口 五十九万三千六百七十三戸

朱引外戸数 六万三千三百五十九戸

同 人口 三十万〇五百八十九戸

戸数合高 二十一万五千五百八十八戸

人口 同 八十九万四千二百六十二人

朱引内地所 二万九千八百七十七ヶ所

同坪数 千〇四十万〇九千七百三十三坪六合四勺六才

同町数 千七百七十七ヶ町

朱引内地券 金高凡六百八十九万二千六百二十九円

(以下区入費割小間・区入費掛り高・朱引外地券と続く)

迷子報標 湯島社内 一石橋畔 浅草寺中 赤羽根橋畔 両国橋畔

万代橋畔

馬車 百十四

人力車 一万七千九百九十七

自転車 四

棺車 四十六

荷車 九千〇七十二

遊所 吉原 根津 品川 新宿 南千住 板橋

貸座敷 七ヶ所合、三百五十五戸 賦金千六百七十円余一月分

内、吉原百二十一戸 上等、九戸旧大見世下唱 此賦金
中等、十二戸同中見世下唱
下等、百同小見世下唱 一ヶ月六百五十円

(中略)

娼妓七ヶ所合、千三百六十六人 此賦金二千七百五十二円一ヶ月分
(その外遊所客数や一ヶ月分の総収入が記されている)

『東京独案内』の項目も首を傾げなくなる項目が並ぶが、『東京一覽』はより一層その傾向が強くなる。少しでも他の本より詳しく、特徴を持たせようとしているのだからが偏質的でさえある。ここではこうした案内書を取りあえず「データブック」型とでもしておこう。

内容を見て分かるように、データブック型の東京案内を購入したのはに限られた観光客であつたろう。購入目的は少しでも詳細なそして地方人が知らないであろうデータを得ることが目的であつた。近世以来日本人の旅は一か所に長期滞在してその地の風景や文化をじっくり楽しむというものは少なく、短時日のうちにいかに多くのものを見るか、手に触れるかを目的としたものがほとんどであつた。見たもの手に触れたものを帰郷後第三者に伝える時、自身が知識人であるという意識があればある程相手を感服させるために詳細なデータが必要であつた。

データブック型に対し寺門静軒の『江戸繁昌記』や名所図会の系譜を引くような著作も出版されている。机上で読む本とでもいえるべきもので、明治七年には服部誠一の『東京新繁盛記』や高見沢茂著の『東京開化繁盛誌』明治十年には岡部啓五郎の『東京名所図会』などが出版されている。『東京新繁盛記』は木版刷であるが、大正十四年に活字本が出版されているので、これにより目次を列挙してみよう。なお初版は漢文だが大正十四年版は読み下し文である。

学校 人力車 新聞社 貸座舗 写真 牛肉店 西洋目鏡 招魂社
京橋煉瓦石 待合茶店 浄瑠璃温習 築地異人館 新劇場 常平社
新橋鉄道 芝増上寺山内 洋書肆 万世橋 新橋芸妓 博覧会 臨
時祭 夜肆 麦湯 西洋断髪舗 築地電信局 商会社 蕃物店 京
鴉家 妾宅 新温泉場 新市街 芝金杉瓦斯会社 公園 女学校
西洋料理店 代言会社

『江戸繁昌記』を思わせる内容であるが、大正十四年版において三木愛花が本書についての解説を寄せている。三木は『江戸繁昌記』が純粋な漢文で書かれたものではなかったが人気を博した。服部の『東京新繁盛記』もまた純漢文ではなく、純漢学者からみれば雑駁・散漫・卑属・猥褻とされたが、本書は漢文の力量を示すために書いたわけではなく、読まれる本、売れる本を書いたと述べ、『江戸繁昌記』との関係については次のように記している。

今日からして『東京新繁盛記』を見る時は、其の体裁に於ても其の材料選択に於ても其文体に於ても、寺門の『江戸繁昌記』に模倣したものであって、格別に其の斬新とか趣向とかいふことを認め得らるゝものでないが、当時一方には文章軌範、八大家文が勢力を持し、一方には『世界国尽』が流行した中流に在って、既に久しく忘れられた『江戸繁昌記』を抽出し、之れを改造修築して新東京、新帝都の新生面、新状態を描写することに着眼したのは、服部氏が単に一種の漢学者でなく、所謂文学界の新進作家であって、之を只寺門静軒の模倣者として片付け去るべきものではなく、寺門の『江戸繁昌記』すら此の服部氏の『東京新繁昌記』を借りて、忘れられた名より再び世に知らるゝに至った如き奇観を呈したのである。

三木愛花は『東京新繁盛記』が『江戸繁昌記』を模倣したものでは在るが、服部の著作が『江戸繁昌記』を再び世に出したとしている。さらに模倣ということについても、服部が『江戸繁昌記』を「改造修築」した新

東京・新帝都の新生面・新状態を描写することに着眼したのは、彼が文学界の新進作家であったからで、単なる模倣ではなかったと述べている。三木は珍しいことに発行部数というか売上部数についても触れている。それによると一万部より一万五千部内外と見積り、明治初年の一万数千部は現在（大正十四年頃）の十萬部以上に相当するとし、一冊二五銭全五冊であるから「其の総売れ高は二万円内外である」とまで書き、この収入が湯島妻恋坂新邸建設費にあてられたことにまで言及している。

明治七年には前に掲げたように『東京新繁盛記』に類する著書がこの外にも出版されているが、高見沢茂の『東京開化繁盛誌』はその序文から寺門静軒の『江戸繁昌記』の影響を受けたことが窺える。

服部と高見沢の著書は東京案内というより東京について論じたものであるが、明治十年刊の岡部啓五郎著『東京名勝図会』は『江戸名所図会』の簡略版といったところで、随所に大沢南谷の絵が配されている。例言において旧来の名所が「湮没せむことを懼れ、一は新名勝の繁盛することを喜び」本書を著わし「東京に來遊する觀光探勝者の便に供す」としている。東京見物のために著わしたということだが、観光の語句が現代的な意味で用いられるようになったことが注目される。

本書の構成は大区別で、第一大区では日本橋・四日市・国立銀行・鋸橋・江戸橋・築地・靈岸嶋・永代橋・新大橋・加藤神社・水天宮・楠公社・両国橋・浅草橋・柳原・万世橋・皇城・三井呉服店・一石橋・京橋が収録され、第一大区は木母寺で終るというように観光名所が並んでいる。

当然だが携帯用の案内書も出版されている。例えば明治九年刊の『改正区分町鑑』は縦六センチ、横一三センチの横帳小冊子で、第一大区から第一一大区までの町村名が記されている。

第一大区

○一小区

宝田町

祝田町

元千代田町

というように町村名が並ぶだけだが巻末に各大小区を管轄する警視庁各署が列記されている。

維新後の東京へ多くの観光客が訪れるようになったのが何時頃からであるかを数量的に把握することは不可能だが、維新後間もなく近世と同様のパターンで多くの人々が東京見物に来ているのではないだろうか。近世のパターンとは伊勢参宮の途中東京を見物するというものである。¹⁵⁾

こうした時期にあつては近世以来の案内書でこと足りたであろうが、都市景観が近世から近代へと姿を変えていくと新たな案内書が必要になってきた。その契機になったのが大区小区制の実施である。この制度は案内書を出版・販売する側にとっても都合のよいものであったろう。

(2) 大区町村制と東京案内

大区小区制は結局日本には馴染まず廃止され、明治十一年東京府は一五区の区制が施されることになった。明治十一年七月政府は郡区町村編制法・府県規則・地方税規則の所謂三新法を制定し、同年十一月郡区町村編制法に基き東京府を一五区六郡とした。一五区は麴町・神田・日本橋・京橋・芝・麻布・赤坂・四谷・牛込・小石川・本郷・下谷・浅草・本所・深川、郡部は荏原・南豊島・北豊島・東多摩・南足立・南葛飾である。

『明治期刊行図書目録』によると、東京に一五区六郡が設けられた十一月に出版された東京案内は八件収録されている。実際にはこれを優に上回る数の案内書が出版されたであろう。しかし十一月に出版された案内書の大半は大区小区制の時期に出版された町鑑の類と内容はほぼ同じで、麴町区内の町は東代官町・西代官町……というように町村名の列記

が中心である。明治十一年十一月に出版されたものは次の通りである。

『改東京町鑑』 福田栄造編・刊

『改区郡町村一覽』 山本平吉刊

『改区分鑑』 井上勝五郎編・刊

『東京朱引内改正区分町名鑑』 川井源蔵刊

『改正東京町村いろは引き』 佐々木綱親 日就社

『東京府下改正区画郡町村明細鑑』 日下清蔵編・刊

『東京府下改正区画郡町村名鑑』 穴山篤太郎刊

『東京府下改正区分便覧』 永田延秋編 青琳堂

(参考・十二月刊)

『東京区分番地改正便覧』 古川嘉平治刊

参考までに十二月に出版されたものも列挙した。すべての出版物に目を通したわけではないが、書名からみて町村名を列挙したものとも間違いなさそう。なお十一月刊のものは全て和装本であり十二月刊のものは洋装本とみられる。こうした町村名列挙型は十一月以降その数を減じ、あえていうなら純粋な東京見物案内が多数出版されるようになってくる。ここでは明治十四年に出版された携帯用の東京案内をみてみよう。『東京名所図会』 谷壮太郎著 加藤正七刊 明治十四年四月
本書の寸法は縦五・五センチ、横二二・六センチの横帳和製本で六〇丁の小冊子である。筆者所蔵本の裏表紙には「千葉県長生郡」と墨書されている。

本書の構成等については凡例に詳しいので次に引用しておこう。

凡例

一 東京名所遊覧の路案内なれハ行李の都合を謀り極めて簡約を主とし名所古跡の内有名なるもの而已を集む

一 遊覧の路順は日本橋より始むるをよしとするに以たれとも東京府中を総て徘徊するハ中央より螺旋形にさぐるをよしとす依て糺町

より筆を起し南葛飾郡に至りて関む

一行文の卑陋なるハ事の解し易きを旨とし文字を後にし婦人小子にも読易からんを欲すればなり

一所々訓を字旁に付せしハ猶読易からざるを憂ひし婆心なり

一往々郡内の名所を区内に認め区内の名所を郡内に認めしは遊覧の都合然らざるを得ざるものあれハなり

一広き東京府中の名所古跡を斯る小冊子へ輯めしなれハ定て脱漏も多かるへし併し江戸名所図会江戸鹿子江戸砂子東京繁昌記東京名

勝志東京開化繁昌誌東京往来等の諸書を考察して著せしなり

明治辛巳四月

著者述

本書の主要部は各区各郡の名勝・旧跡等の案内で、各丁の冒頭には銅版画が掲げられている。巻末には東京下町村名・名山水池井谷淵澤一覽・名木一覽・景物一覽・新橋横浜間汽車時刻表・浅草広小路ヨリ新橋迄往復馬車賃銭表・中仙道往復馬車賃銭・八王子往復馬車・宇都宮より東京迄各駅間乗客賃銭表・堀一覽・里程概表・橋名一覽が掲載されている。

『明治絵新刻入 東京名所案内』乾坤二冊 安井乙熊編 榊原友吉刊 明治十四年六月

本書の寸法は縦九・三センチ、横六・五センチの和装本で、乾が四〇丁、坤が三九丁の小冊子で布張りの帙に収められており、出版の主旨は緒言に記されている。

緒言

一我か東京ハ殆と三百年間徳川氏の居城にして明治元季復古の后帝都となれり而して其三百季間府下の名勝□□を記せし書冊少ならず然れ共王政旧に復し我か東京中央政府の中心となりし以来旧藩邸変して堂々たる官衙と化し木瓦の家屋廢れて□□たる煉瓦屋石室となり又鉄道電信瓦斯燈等の設ありて大に其趣を異にせり於

是乎旧勝古蹟の書は自ら陳腐に属するの姿となり今にして其隆盛を記せし書なきハ深く恨とする処なり是れ予の不学を顧みず此著ある所以なり此編素より大人君子の為にするにあらず偶々東都に來遊せらるゝ諸君に官衙の宏壯諸高麗の□□の橋梁の壯麗公園地名勝等の概略を記し詩頭を附し以上諸所の案内者と為さんとするにあり然れ共僅々たる小冊子府下百般の事項を竭す能ハす幸に此省略を諒せよ時に明治十四季五月第三土曜日芝西居士芝西書屋に於て書す

緒言によれば明治に至り新たな建造物・鉄道・電信・ガス等の設備が整い景観が変わってしまった。そのため昔からの旧勝古蹟の案内書は陳腐なものになり、現在の隆盛を記したものがなかった。そこで不学を顧みず本書を著したという。

本書乾の本文の冒頭には「東京名勝方角式覽」の地図と、「東京府下区分町鑑盡」が折り込まれている。本書の構成は『東京名所図会』とはほぼ同様で、麹町区から始まる区別で観光名所が記され、およそ半丁毎に銅版画が挿入されている。坤は三一丁までが乾の続きで、三二丁からは付録として東京一覽になっている。東京一覽に掲載されている内容は○区郡長役所々在○府下各警察署○拾物遺物掲示場○迷子報標○府下電信局○府下郵便局○東京横浜間鉄道賃銭表○銀行並諸商会社○有名の六大橋○五公園并博物館○四季遊観案内○有名の植木市○演劇場○遊廊○魚市場である。

『改東京案内』 児玉永成著 大蔵孫兵衛刊 明治十四年

本書の寸法は縦一二センチ、横一六センチの和装本で、七二丁。前掲二書より大振りである。出版月は明記されておらず、板権免許日が三月七日、凡例文末には十月と記されている。『明治期刊行図書目録』には三月刊として処理されているが、ここでは十月とした。著者については児玉永成著としたが奥付に増補人とあるから「改正」前の著者も児玉永成

であるかどうか不明である。

『掌中東京名所図会』や『明治新刻入東京案内』は東京名所の案内が主で、東京に関するデータは従であったが、『改訂東京案内』はデータブック型に属するもので、目次は次の通りである。

○東京の略説 ○皇城 ○大祭日 ○新年式 ○礼服用 ○通常
礼服用用日 ○号砲并半鐘打方時の鐘 ○諸官省局位地 ○警察署
位地 ○裁判所并支庁 ○郡区役所 ○東京町村一覧 ○華族歴君
卿宅 ○電信局并賃銭表 ○郵便局并賃銭表 ○公立学校 ○小学
校 ○官立病院 ○私立病院 ○銀行一覧 ○有名ノ諸会社 ○拝
観地 ○公園地 ○遊園遊観地 ○四季遊覧花歴 ○鉄道時刻賃銭
表 ○東京品物配達所 ○東京より諸方へ廻漕会社并賃銭表 ○東
京より中仙道郵便馬車并時刻賃銭表 ○紙幣通送料 ○東京より熊
谷及び高崎迄宿継里程表 ○宇都宮馬車賃銭表 ○東京新橋より浅
草迄乗合馬車賃銭表 ○東京神社略説 神社仏閣毎月縁日 ○仏閣
略説 ○旧跡略説 ○渡し船場 ○橋の部 ○川の部 ○山の部
○原の部 ○堀の部 ○迷子の報標 ○諸方名物 ○毎日魚市場
○古着市場 ○毎夜雑品市 ○七月草花市 ○雛人形幟市 ○十月
恵比寿講市 ○年ノ市場 ○遊里貸坐敷有地并揚代金 ○芝居并直
段附 ○小芝居ノ部 ○東京諸芝居出勤ノ俳優 ○各区見世物場所
并諸仏開帳場 ○勸進大相撲興行場 ○奉納角力 ○花角力場所
○東京大相撲力士東西幕ノ内連名 ○東京府下有名ノ寄席 ○東京
寄席出勤芸人落語家 ○釣堀并直段附 ○船宿有地 ○温泉場 ○
待合茶屋 ○旅籠屋 ○写真師 ○新聞社 ○有名ノ雑誌類 ○食
物ノ部

多岐に及ぶ各項目を説明する余裕はないが、目次の題名からでは内容の分かりにくいものがいくつかあるので説明を加えておこう。まづ「大祭日」は四方拝・元始祭・孝明天皇祭など、朝廷の主要行事で、新年式

は政府高官・各省庁・陸海軍の新年諸行事である。拝観地は「吹上御庭」「浜離宮御庭」「後樂園」であるが誰もが常に「拝観」できる場所ではない。見物の対象でもある官公庁などは一覧としてまとめられているが、社寺や名所旧跡の類もそれぞれ別途まとめられている。公園地・遊園遊観地・四季遊覧花歴・東京神社略説・仏閣略説・旧跡略説などが見物の中心になるものだが、種類別のため一つの地域の社寺や旧跡等を見物するには不便であったろう。ところで凡例によると本書と対になる絵図も別途発行されていた。

一別に開明東京新図有りて此編と同じくいろは及び

一二ろ番号を以て之を符合したれば此編図と照会すへし

一里程に▲を以て施すハ日本橋より算ふるの標なり、

とあるように本書と地図を対照できるよう工夫されていた。一例として東京神社略説のうちから湯島天満宮を引用しておこう。

五〇湯島天満宮 ▲より十八丁

湯島天神町

北野天満宮を勧請す毎月廿五日祭礼なり大祭ハ十月十日なり
本書と地図を利用すれば華族の東伏見宮嘉彰親王邸であろうと、政府高官大隈重信邸であろうと容易に探し出すことができたわけである。

これまで東京案内の出版とその内容を行政区画の改革に沿って述べてきたが、東京案内を購入する側、つまり観光客が多数東京にやって来るという視点からみる場合、東京で開催された各種博覧会やイベントが重要な意味を持つてくる。中でも特に注目されるのは内国勧業博覧会である。第一回は明治十年八月二十一日から十一月三十日まで、第二回は同十四年三月一日から六月三十日まで、第三回は同二十三年四月一日から七月三十一日まで、いずれも上野公園で行われている。内国勧業博覧会は第五回まで行われるが、四回は京都、五回は大阪で開催されている。第一回の時は博覧会がどのようなものか理解されなかったよう、高

村光雲は次のように述べている。¹⁶⁾

明治十年の四月に、わが国で初めての内国勸業博覧会が開催されることになる。ところがその博覧会といふものが、まだその頃の一般社会になんのかサッパリ様子が分らない。実にそれはをかしい程分らないのである。今日ではまたをかしい位に知れたのである。であるが、当時は更に何のか意味が分らない。それが政府の方からは、掛りの人たちが勧誘に出て、諸商店、工人などの家にて行って博覧会といふもの、趣意などを説き、また出品の順序手続きといったやうなものを詳しく世話をし、分らないことは面倒を厭はず、説明もすれば勧誘もするといふ風に、中々世話を焼いて廻ったものであった。

光雲言うように博覧会といったところで一般大衆は初めて聞く名称であり、なかなか理解の得られるものではなかったろうし、まして出品する側としては戸惑いもあったろう。

第一回の内国勸業博覧会は初めてとはいへ、会期一〇二日間、四万四一六八人の来館者があり、地方からの観光客も多数上京したであろうが、東国方面からは伊勢参宮を兼ねての博覧会見物がかなりあったであろう。

第二回は会期一二二日、来館者数は八万二、三九五五人になっている。第一回に較べてその規模も拡大しており、地方からの来場者は博覧会見物と東京見物を併せると、東京に数泊するケースも増加したとみられる。地方からの来場者数を示すことはできないがその数は激増した。それを示すごとく明治十四年三月「東京名所案内社」が設立された。¹⁷⁾

明治十四年三月十二日受
知事印 書記官印

勸業課印

日本橋区役所ヨリ東京名所案内会社設立届廻送有之候間、呈一覽候也、

○朱
庶第百八十五号

東京名所案内会社

右客月設立届出ノ者ニ付キ、十三年乙第十四号達ニ依リ御送致ニ及候也、

明治十四年三月三日

東京府日本橋区長

館 興敬印

東京府勸業課長 藤田季莊殿

東京名所案内会社設立御届

今般別冊之通り東京名所案内社ヲ、日本橋区小網町三丁目貳拾八番地永岡長右衛門宅へ仮会社相立仕候間、此段及御届候也、

明治十四年二月五日

本所区石原町参拾五番地寄留
千葉県土族

社長 田中安積印

日本橋区小網町三丁目貳拾八番地

東京府土族

幹事 佐藤正之印

日本橋区小網町三丁目廿八番地

東京府平民

支配人 永岡長右衛門印

日本橋区長 館 興敬殿

これによれば社長の田中安積、幹事の佐藤正之、支配人の永岡長右衛門の三名は二月五日に日本橋区長宛に届を出し、三月三日に東京府勸業課に廻送されているが、明治十四年三月十日付の「東京日日新聞」¹⁸⁾によれば届は受理され営業を開始している。「東京日日新聞」の記事は東京名所案内社創立の事情を具体的に知ることができる。

馬喰町の旅人宿連中が申合わせ、東京見物に出て来る客人が、悪宿引などにかゝりて難渋することのなき様にとて、今ど東京名所案内社といふ一社を設け、日数四日にて、全府名所の順覧案内をなし、一人に付き金一元を申受くること、定めたるよし、至極良方なるべしと思はる。

実態としては右のような事情から東京名所案内社を創立したわけであ

るが、次に社則をみてみよう。

東京名所案内社則

東京名所案内社

緒言

抑名所案内社ヲ設立スル原因タルヤ、専ラ社会人民ニ公益ヲ施サン
トス。其所謂ハ、内外各国ノ人ヲ問ハズ、始メテ我帝京ニ来ルトキ
ハ、地理不明ノ為メニ、馬車人力車ニ乗シ以外ノ失費シ実ニ無益ナ
ル金錢ヲ投棄ス。嗚呼方今文明開化ノ時運ニ際シ如此ハ甚ダ豈嘆ズ
ベキコトナラズヤ。依テ今般些少ノ手数料ヲ受ケ、該京地理不明ノ
人ヲシテ案内者ヲ附シ容易ニ了解セシメンコトヲ欲シ、此ノ社ヲ設
ケ名ツケテ名所案内社ト云フ。其ノ方法左ノ如シ。

東京名所案内社

社則

第一條 名所トハ上野公園・浅草公園・墨陀・亀井戸天神・靖国神
社・愛宕山・芝山内・高輪義士ノ墳墓・深川ハ幡等ヲ云フ。

第二條 案内ヲ乞フ者ハ当日ヨリ一日前ニ申込ミアルベシ。

但シ、郵便はがきニテ報知スルモ不苦。

第三條 案内ノ時間ハ日ノ長短ヲ不論午前第八時ヨリ午后第四時ヲ
限リトス。

第四條 案内者ハ滿二十年以上六拾年以下ニシテ強壯ノ男子ヲ附ス。

第五條 案内ヲ乞フ者ハ八時開前該社ニ出張ノ事。

第六條 当日雨天ノ時ハ順延ノコト。

第七條 案内者ハ人員ノ多少ニ関ハラズ一組一人ノコト。

第八條 案内ヲ乞フ者途中往來其他遊園ニ於テ喧嘩口論スルヲ禁ズ。

第九條 案内者昼飯ハ該社ヨリ持参ノコト。

第十條 案内手数料トシテ一人ヨリ拾金五拾錢ヲ收納致スベシ。

其余一人毎ニ金貳錢ヲ増ス。

但、滿十五年以下ノモノハ半額ヲ納ムベシ。

第十一條 案内手数料ハ前金ニシテ証書ト更換スベシ。

第十二條 一株金五拾円トシ、社員三名、則チ金百五拾円ヲ以テ該
社資本金トス。

本所区石原町参拾五番地寄留
千葉県土族

社長 田中安積 印

日本橋区小網町三丁目貳拾八番地

東京府土族

幹事 佐藤正之 印

同区同町同丁目同番地

東京府平民

支配人 永岡長右衛門 印

地方からの観光客がいくら東京の案内書があるからといっても、東京
各地の名所旧跡を円滑に見て回るのは困難なことである。観光地におけ
る観光案内人は既に近世には存在しており、主もだった所では江戸・鎌
倉・京都・奈良などにその存在が確認されている。特に江戸のような広
い地域に点在する名所旧跡を短時日のうちに一か所でも多く見て回ろう
という形態の観光では案内人に頼らなければならない。こうした案内人
が近代に至っても近世同様の観光案内を行ったり宿引をしていたよう
である。しかし悪質な行為をするものが増えてきたため、旅館屋側が自衛
手段として東京案内社を設立したわけであるが、悪質な事例を掲げてお
こう。

(東京曙新聞 明治十三年八月二十三日)

此節は万代橋前後へ、何者とも知らず十四五人位づゝ、夕方より道
路にイミ居る由につき何者にやと思ひしに、是は馬喰町の旅人宿の
手代にて、草鞋脚半杯を附たる往来人と見ると頻りに泊りをすゝめ
連行く為めに出張る者なりといふが、例の田舎者を吉原見物杯と唱
へ、暴茶屋へ引きずり込み、以外の金をむさぼる連中も此党中ある

ならん。²⁰⁾

(東京日日新聞 明治十三年十月十一日)

旅籠屋の宿引には悪弊の多きより、先ごろ其筋にて厳しく差止められしが、此ごろ又一法を巧みて駒込追分など咽喉の地に腰掛茶屋を設け、馬喰町組連雀組など、組を別けて旅人を釣ること今に絶えず。

また人請宿にも田舎者と侮どり旅籠屋と馴合ひて所持の金銭衣類などを剥ぐ輩のあるよしなるが、孰れも近近に嚴重の法を立てられて無辜の良民が狡點手段に懸らぬ様にせらるゝと云ふ。²¹⁾

近世そして東京名所案内社が設立される以前の案内人の組織や実態は不明であるが、それぞれ旅籠屋と結びつき、宿引も兼ねていたようである。

(3) 東海道線の開通・第三回内国博覧会

東京の案内書出版は年ごとに増加していくが、東京の案内書の出版及び東京観光に一つの画期をもたらしたものは、明治二十二年の東海道線開通と、翌二十三年の第三回内国勸業博覧会である。

東海道線の開通は東京の案内書というよりは日本の旅行案内書に大きな変化をもたらした。既に鉄道は近畿方面においてはその路線を拡大していたが、日本の幹線である東海道の開通は政治・経済・文化に多大な影響を与えるものであった。

案内書は一つの地域を案内するものと、出発地から目的地までの行程を案内するものに大別することができるが、ここでは仮に前者を地域型案内書、後者を行程型案内書としておこう。地域型案内書は本稿で取り上げている東京案内書などであり、行程型案内書とは近世という道中記に属するものである。

徒歩による移動が主流の時代にあつては、旅人自身が全行程のどの辺りを歩いているのかを承知しておかなければならない。そのため極めて

簡便な道中記は東海道であれば宿場名と間の村、箱根・新居関所、大井川等の大河川名、里程を記すのみであった。これを基本として經由地の情報が盛り込まれるわけである。しかし鉄道の発達により列車に乗れば間違いない目的地まで達することができるようになったため、出発地から目的地までの間は単なる通過地になってしまった。

そのため行程型案内書は車窓からの眺めを述べたもの、または鉄道沿線の駅を中心とした案内が中心になってくる。後者は旅客がこの駅で下車しても対応できることを想定しているが、より詳しく下車駅中心のことを知りたければ地域型案内書を求めることになる。こうした事情から近世的な行程型案内書は次第に減少し、地域案内書を集合したもの、つまり関東地方・中部地方といった案内書へと移行していく。

第三回内国勸業博覧会は明治二十三年四月一日から七月三十一日まで一二二日間開催され、来観者は一〇二万三六九三人に及んだ。博覧会は新聞を始めとする多様な活字媒体により宣伝されたが、『風俗画報』²²⁾も第十五号を特集に当てている。博覧会において好評を博したものがパノラマ館である。『風俗画報』の特集号が出版されたのは四月であるが、当然編集はそれ以前、特にパノラマ館を取り上げていない。まさか多くの人気を集めるとは思っていなかったのだろう。

パノラマ館の人気は大変なもので、博覧会終了後もそのまま残され、その後一時閉館するが明治二十九年八月に上野公園内の桜が岡の摺鉢山近くに移り、明治の末に至って廃止されている。²³⁾

パノラマは娯楽として人気を博しただけではなく、パノラマの視覚・幻覚は西欧そして日本の文学にも大きな影響を及ぼしている。²⁴⁾

東海道線の開通と第三回内国勸業博覧会は東京以西の観光客も多数集めたと考えられる。鉄道発達以前においては江戸・東京への観光客は圧倒的に東国が多かったとみられる。それは何度も述べてきたように一般民衆は伊勢参宮の途中江戸・東京へ立ち寄ったためである。

これに対し畿内を中心とした西国の一般民衆にとって、観光を目的として江戸へ来るメ리트は少なかったであろう。京都や奈良には有名な社寺や史跡名所が軒を連ねるように多く、江戸に所在する社寺等はいずれも京や奈良に本山や本社を有するものであり、態々江戸まで出向く必要も認められない。近世の旅の象徴でもある伊勢参宮にしても、畿内を中心とした地域からは多くの日程も必要としないが、このことは東国と西国の地理感を考える上での一つの鍵になろう。このように記すと西から東への旅人が極めて少ないように受け取られてしまうが、あくまでも社寺参詣・行楽としての旅の場合であることを改めて断っておく。

明治に至り東京が日本の首都になり、天皇が東京に居を定めるようになると、西国における東京を見る目にも変化が生じたであろうし、東海道線の開通は西国から東への移動を容易にした。こうしたことから東京より西の地域からの東京見物も増加したとみることができる。

明治二十二年二十三年という時期は東京見物という観点から見ると、一つの転期を迎えたといえる。この時期に発行された東京の案内書は明治において群を抜いて多かったようだが、ここでは『明治期刊行図書目録』を中心に列挙しておく。

○明治二十二年

- 梅亭金鷲編『東京漫遊独案内』 漫遊会 四月
- 深津雅直著『東京市区改正全書』 法弘社 五月
- 岡本半溪著『市区改正後日の東京』 井ノ口松之助 五月
- 児玉又七著『東京明細記』 大橋堂 六月 和装本
- 塚原靖著『増訂江戸沿革私記』 石塚徳次郎 九月
- 原田竹外編『東京土産』 文魁堂 十一月
- 『東京名勝三十六景』 尾関トヨ 十二月 和装本

○明治二十三年

- 尾崎逸足著『今日之東京』 春陽堂 一月

新井耕作編『東京地名伊呂波引』 新井昇三 一月

原田竹外著『東京名所図会』 双々館 二月

中野了随著『東京名所図会』 小川尚栄堂 二月

永島春曉著『改訂東京名所案内』 長谷川常治郎 和装本

磯江潤編『東京市中案内大全』 哲学書院 三月

井上巴城編『東京市中案内大全』 一名東京及東京近傍案内 緒方功刊 三月

佐伯瓢々子著『東都指南車』 一名東京及東京近傍案内 緒方功刊 三月

上田文斎著『東京名所独案内』 大阪青木嵩山堂 三月

——『東京名所図会』 東雲堂 三月

野口竹次郎編『新東京独案内』 博文館 四月

伊藤栄次郎編『新編東京独案内』 明細図入 金鱗堂 四月

泰獅子郎著『東京案内』 巢鴨彫刷会社 四月

八木一郎編『東京見物独案内』 竹堂 四月

村田峯次郎著『東京地理沿革誌』 一名東京京字典 稲垣常三郎 四月

梅亭金鷲編『東京独案内』 礫川出版会社 四月

——『新東京独案内図会』 第一〇二編 斯文館・叢書閣 四月

菅復三郎編『雅俗類編』 東京名所指南 小杉賢治 五月

大槻文彦編『雅俗類編』 東京名所指南 小杉賢治 五月

永井良和編『東京百事便』 三三文房 七月

——『改訂東京名所一覽絵図』 公業社 八月 折本

(編著者、書名、出版社へ出版人へ、出版月の順に記した。編著者不明の場合は——で示した。)

右のうち『東京漫遊独案内』の梅亭金鷲は文政四年(一八二二)江戸両国に生まれた戯作者として知られるが、彼の歿年は明治二十六年であるから、本書は晩年の作である。人気を博したものが翌年改題して出版されている。原田竹外も二十二年と三年と二種の本を出版している。上田文斎(維曉)の『東京名所独案内』は『内国旅行』日本名所図絵シリーズ七巻出版後に附録として刊行されたものである。

明治十四年には地方からの東京見物人を対象として「東京名所案内会社」が設立されたが、二十三年には「東京案内会社」が設立されている。十四年に設立された東京名所案内会社とはまったく別会社のものであり、この当時東京名所案内会社は既に解散していたともみられる。東京案内会社はその設立主意などから明らかに第三回内国勸業博覧会を目的として設立されたものであった。

東京案内会社設立御届

今般同志者ト協議之上諸ノ便宜ヲ謀リ東京案内会社ナル者ヲ設立、別紙定款ニ従ヒ營業仕候間、此段御届申上候也。

明治廿三年三月十四日

岩手県陸中国神貫郡
里川口町三拾三番地

平民

発起人 小田嶋 房次郎 印

當時府下京橋北横町十一番地

寄留大沢幾次郎方

岩手県陸前国気仙郡

氷上村高田五拾六番地

平民

発起人 菅 野 文 助 印

當時府下京橋北横町十一番地

寄留大沢幾次郎方

京橋区長 大 森 敬 之 殿

東京案内会社定款

主意書

今や我国四通八達、東ヨリ西ヨリ交通往来ノ道開ケ、此ノ東都ニ集マルモノ甚タ多キニ至レリ。特ニ本年ノ如キハ第三回内国博覧会ノ開設アリ、続テ空前絶後古今未曾有ノ国会開設アリ、日本全国各県各地ノ人士汽車ノ便ヲ借りテ以テ此地ニ来ルモノ実ニ其幾万ナルヲ知ルヘカラス。然リ然ルニ東京市中旅籠屋旅館等ノ状態ヲ察スルニ、

其營業上ノ信用ヲ重ンスルモノハ兎ニ角、只タ一時目前ノ利益ヲ貪ラントスル狡猾ノ輩ハ巧ミニ地方出府ノ旅客ヲ欺キ、或ハ車夫惡漢等ト腹ヲ合セ不当ノ金錢ヲ浪費セシメテ為メニ冗費散財ノ損害ヲ受ケシモノ拳テ数フヘカラス。政府夙ニ茲ニ視ル処アリ、宿屋取締規則及ヒ車夫取締ノ法設ケ是等惡漢ノ謀根ヲ断テリト雖モ、人情弥々輕薄ニ流レテ邪智奸計ヲ恣ニスル今日ノ場合、時ニ或ハ巧ミニ法律ノ網ヲ通レテ其ノ譎計ヲ肆ニセントスル者ナキヲ保スヘカラス。特ニ本年ノ博覧会、地方諸人ノ集マルヲ見込シテ一時千金ノ巨利ヲ得ントスルモノ如何ナル狡猾ノ手段ヲ以テ地方上京ノ諸人ヲ欺カントスル者アルモ知ル可カラス。余輩茲ニ見ルアルモ豈之レヲ防クノ法案ナクシテ可ナランヤ。聞ク、彼ノ欧州仏国ノ「パリス」其他ニ於テハ案内会社ナルモノアリテ能ク其ノ旅客ノ安全ヲ謀リ、途中往来ニ於テ物品若クハ金圓ヲ其地ニ届ケントスル者其ノ会社ノ印章ヲ帶ブル者ニ之レヲ托スレバ、如何ナル大金宝物ト雖モ毛厘ノ間違ナシト云フ。以テ其至便ニシテ信用ノ厚キヲ知ルヘシ。我国各県ノ人士始メテ此東都ニ来リ、縦令惡漢無頼ノ毒手ニ罹ルコトナキモ、地理不案内ノ為メ其不便ヲ感スルコト極メテ多カラン。余輩茲ニ嘆スル所アリ、是等諸人ノ便宜ヲ計リ東京案内会社ナルモノヲ設立シ、以テ地方諸人ノ安全便益ヲ謀ルコト爾リ。

具体的な数値は示されていないが、この主意書によって各地から相当数の観光客が東京を訪れていることは確かである。その理由として主意書は交通の発達、第三回内国勸業博覧会、そして観光とは異なるが国会開設に伴う東京への旅行を挙げている。明治十四年に東京名所案内会社が設立されたものの、旅行者に対する不当な行為は一向に改まらなかった。以下規約の中から直接旅行者に拘わる箇所を中心に抄出しておこう。

東京案内会社規約

第一章 総則

第一條 本社ハ、東京案内会社ト称スヘシ。

第二條 本社ハ、京橋区北横町拾壹番地ニ設置シ、其事務ヲ取扱フヘシ。

第三條 本社ノ目的ハ、各地各県ヨリ東京ニ来ルモノヲ案内シテ不便不都合ナカラシムルニアリ。

第四條 本社ニ於テ取扱フ所ノ業務ハ左ノ如シ。

第一 各地各県ヨリ上京ノ諸人ニ適當ノ旅宿ヲ案内スルコト。

第二 諸人ノ依頼ニ応シテ博覧会其他各地ノ遊覧案内ヲ為スコト。

第三 諸人ノ需ニ応シテ地理不明ノ行先ニ案内ヲナシ、又ハ之レカ用ヲ弁スルコト。

第四 人ノ依託ヲ受ケテ金員其他諸物品ノ保監ヲナシ、之レカ安全ヲ謀ルコト。

第五 依頼者ノ需ニ応シテ諸物品購求ノ周旋ヲナスコト。

第六 案内ノ参考ニ供スヘキ諸絵図説明書ノ如キモノヲ印刷スルコト。但シ以上ノ項目ニ付テ之レカ取扱手続方法ハ別ニ細則ヲ以テ之レヲ定ム。

(中略)

第五章 細則

第十九條 旅宿案内

第一 本社ニ於テ確實ト認ムル旅宿屋ト結約シ、本社ノ徽章○機カアル旗○機カヲ其入口ニ立ツヘシ。

第二 本社雇夫ヲ停車場及其他要路ニ遣ハシ、旅宿屋ノ案内書ヲ出シ、及乗車ノ周旋ヲナサシム。

第二十條 博覧会案内

第一項 本社ハ、博覧会縦覧人案内切符及懷中物保監切符ヲ

發行スヘシ。

第二項 本社ハ、博覧会縦覧人案内切符所持ノ客ニ対シ、左ノ責ヲ負フヘシ。

一 休息所ヲ案内スルコト。

二 休息所ニ於テ麦湯一盃ヲ進スルコト。

三 草履ヲ貸与スルコト。

四 縦覧切符購求ノ使ヲナスコト。

第三項 本社ハ、博覧会近傍ニ於テ確實トミトムル腰掛茶屋ト特約ヲ結ヒ、本社ノ織○機カヲ立テ、休息所案内ノ表トナスヘシ。

第四項 本社ハ、博覧会縦覧人案内切符所持ノ客人ニ対スル義務ヲ行フニ於テ不都合ナカラシムル為メ、特約ヲ結ヒタル腰掛茶屋ニ若干名ノ雇夫ヲ遣置クヘシ。

第五項 本社ハ、懷中物保監切符所持ノ客人ニ対シ、左ノ責ヲ負フ。

一 懷中物保監スルコト

二 本社ノ怠ニ依リ保監品ヲ失ヒタルトキハ、相当ノ代金ヲ弁償スルコト。

第六項 本社ハ、会場ノ入口ニ箆筒ヲ置キ、懷中物保監切符所持ノ客人ノ懷中物ヲ預リ、引替番号ヲ渡スヘシ。

第七項 本社ハ、物品ノ保監ヲ嚴固ニスル為メ警官ノ出張ヲ乞フヘシ。

(以下略)

東京案内会社の主たる営業内容は旅宿の斡旋、博覧をはじめとする遊覧案、行先がよく分らない場合の道案内、さらに第四條の第四は金銭・物品の一時預りと見てよいだろう。第五の購入希望物品の斡旋等であるが、その目的とするところは博覧会の案内にあったことは第二十條から

明かである。博覧会に於いても物品の一時預りが営業内容の大きな部分を占めているが、スリ等による被害を予想してのことだろうか。

会社の規模は資本金一万円とし、一株五〇円で二〇〇株を募集する。組織は役員として社長一名、副社長一名、支配人一名、書記二名、傭員として頭取一名を置いている。頭取は雇夫の指揮監督を行う職である。この会社に雇われた雇夫が実際の職務に従事するわけだが、雇員である頭取と雇夫は揃いの法被を着用していた。

明治二十二年は東京の案内書の転機というより、東京の観光そのものに一つの転機をもたらしたものである。これは推測になるが、東京見物は一泊が主流であるものの、この頃から滞在型の東京見物もその数を増してきたと思われる。又案内書の装丁も和装本から洋装本が主流になるのも明治二十一年頃からのようである。

(4) 東京勸業博覧会

東京に多くの観光客を集めた内国勸業博覧会はその後第四回が京都岡崎で、第五回が大阪の天王寺で開催された。政府は明治四十五年に万国大博覧会並の第六回博覧会を計画し、その前提として明治四十年に東京府により東京勸業博覧会が開催された。しかし第六回の博覧会は財政難のため中止になっている。

大規模な博覧会が久しく行われなかったためか、開会前から評判も高かったようである。『風俗画報』も五回に亘って「東京勸業博覧会図会」を特集している²⁶⁾。博覧会の開期は三月二十日より六月二十日までであるが、実際に閉会式が行われたのは七月三十一日のことである。

『風俗画報』は博覧会会場の施設や出品物をはじめ、微に入り細に入り説明しているが、ここでは地方からの観客に関する事項をみてみよう²⁷⁾。地方からは相当数の旅客が予想されるため、東京市内の旅館は一人一室の借り上げを遠慮してもらうよう決議している。

● 旅店の決議

市内各旅店組合は、此程日本橋区呉服町の事務所に幹事会を開き、旅客待遇上に関する左の決議をなしたるが、組合各旅店は之を客室に掲示する等なり。

今般東京勸業博覧会開設相成候に付ては各地方より御上京の御客様にと既に開会前より予約御申越の方にも多々有之盛況に御座候故開会に至り候は、非常に混雑仕り客室の御割当にも差支候場合相生じ可申從て今日の通り御一人御一室買切の義を相叶申間敷と存候尤も当店に於ても平素の御愛顧に対し精に繰合せ御待遇上可相成御満足相成候様取計可申候得共自然一時に込合ひ候節は幾重にも御勘弁被成下御止宿希候依て左の通組合一同申合候に付茲に稟告仕候敬具

一、東京勸業博覧会開会中に限り御一人にて一室御買切之儀は平に御用捨相願候且亦場合に依りては御合宿願出候儀も有之候に付予め御承諾の上御投宿可被下候以上

明治四十年二月

東京旅人宿組合

宿泊予約も殺到していたようだが、結局は合部屋をお願いするとうものである。これは旅人宿組合が収入増加を意図したものとみられるが、基本的には旅客のための処置であったことが、警視庁の決議などからも分る。

● 博覧会と警視庁

取締大方針の議定

警視庁は二月二十日午後二時より市内十五区六郡の各警察署長を樓上会議室に会し臨時會議を開きたる結果博覧会開期中諸種營業及び交通に関する左の取締事項を議決したり。

宿泊其他に関する件

(一) 宿泊人員多数の爲め之を旅人宿下宿屋等に収容する能はざる

時は寺院其他適応の家屋を充用せざるを得ざる場合もあるべく是等に付いては各区長へは予め協議を遂げ（所長より協議ありたる場合には相当協力すべき旨市長より区長へ示達し置く等）其準備を為し置き出京者をして宿泊所に当惑するが如き事なき様注意手配りすること

(二) 旅人宿、下宿屋に於ては宿泊人の住所氏名年齢を洩れなく記帳することに力め且つ左の如き名刺様のものを宿泊人に渡し置き外出の際必ず携帯せしめ途中に於ける事故其の他の場合の便に供せしむること

何区何町何丁目何番地
宿屋屋号何某方

何 某

(以下略)

警視庁においては旅客を旅宿等に収容しきれない時は寺院等の利用を認めている。博覧会を目的として上京する学生の数も多く、文部省は次の寺院を学生の宿泊所⁽²⁸⁾にしている。

● 学生宿泊所

博覧会参観のため地方学生の団体を為して上京する者続々あるを以て、帝国教育会は文部省普通実業の両学務局長と協商の上、左記の場所を学生の宿泊所と定めたる由。

本郷区追分	大恩寺
下谷区谷中三崎南町	妙行寺
下谷区谷中坂町七十八	妙福寺

⁽²⁹⁾ 東京勸業博覧会は七月三十一日に閉会式を挙行するが、この日は閉会式終了後諸門を開放し無料観覧になった。『風俗画報』には「六時頃より

は涼みがてらの浴衣かけに相伴って押寄せし人々夥しく、電車は満員又満員、開場と同時に続々入場し、且つ昼より居残れる人々と合して、場内の賑ひ一方ならず、上野の山は人の山を築かれたり」とあり、大盛況のうちに幕を閉じたが、開催中の入場者は六六一万八九〇三人にのぼった。

この年には芝公園において婦人博覧会も開催されている。会期は当初の予定では四月十四日から六月三十日までであったが、七月三十日まで延期されている。

東京勸業博覧会は東京府の主催で開催されたが、東京市も当然これに協力した。その一つが『東京案内』の刊行である。『東京都の修史事業』⁽³⁰⁾によれば東京市は明治三十四年修史事業を開始するが、これといった成果を挙げることができず、三十八年に構想を改め再発足した。助役河田休を委員長に、市会議員中鉢美明・坪谷善四郎⁽³¹⁾・宮川鉄次郎を調査囑託とした。再発足したものの進捗状況ははかばかしくなく、『東京案内』編纂によりその責任の一端を果たそうとしたらしい。

実際の編纂業務には当時新聞界にあった塚越芳太郎を編纂囑託とし、外に島田一郎・室又四郎そして木暮理太郎がこれに加わった。塚越芳太郎が囑託に就任したのが三十九年四月十四日であるから、博覧会開幕までは僅かな時間しか残されていなかった。それでも何とか四十年四月十日発行に漕ぎ着けている。本書は上下二巻からなり、上巻は七五二頁、下巻は八三九頁に及ぶ大著である。本書については朝倉治彦が精緻な書誌的解題を行っている⁽³²⁾ので、ここでは贅言を尽くすことはしないが、本書の構成だけは列挙しておこう。

総記

- 一 東京の地理
- 二 過去の東京
- 三 現在の東京

四 都府としての設備

皇城記

(宮城・赤坂・青山離宮・浜離宮・芝離宮等)

市街地

(各区の概要を記す。郡部は近郊と題してその概要を記す。)

附 録

市中及び近郊に存する太古の遺蹟 (坪井正五郎)

なお朝倉によれば、本書は何回か版が重ねられているようだが不明とし、少なくとも官庁版と民間版に分けられるという。

『東京案内』は明治期における東京を著したものとしては最も優れた著作ということであり、その後の東京市の編纂物にも影響を与えたというが、東京見物に持ち歩くことができるようなものではない。机上版東京の案内書である。このことを意識してか『東京案内』と平行して携帯用の『東京遊覧案内』が出版されている。奥付によると明治四十年三月十五日発行、著作者東京市役所市史編纂係、発売所博文館とあり、『東京案内』より先に刊行されている。本の大きさは縦一五・二センチ、横九・四センチと小さく、頁数は三一二頁で付録として「東京市街及近郊之図」がついている。本書の構成は次の通りである。

如何に東京に入るべき乎

如何に東京に宿すべき乎

如何に東京を観るべき乎

如何に麴町区を観るべき乎

(以下同じ題で区名のみ変る)

如何に郊外を観るべき乎

如何に東京勸業博覧会を観るべき乎

如何に東京を去るべき乎

構成から分るように本書はまさに東京博覧会に向けて作られたもので

ある。この頃の軽便な携帯用案内書といえは紙質・装丁も粗末で活字も読みにくいものがほとんどだが、本書は造本その他従来の携帯用案内書の域を越えるものであった。図版も多用されているが、この頃には銅版から写真が主流になってきている。

本稿は東京の案内書の内容分析というより、案内書の刊行状況を軸に東京の観光というか、東京見物をみてきた。その後も当然大小の東京案内が刊行され続けるが、右に述べたような視点で明治の東京の案内書を見ると、その最後を飾るものが東京市編纂の『東京案内』『東京遊覧案内』であった。さらに案内書自体明治三十年代中頃から一つの変化を生じているようである。

② 滞在型の東京見物

(一) 渋川玄耳著『東京見物』

明治期における地方からの東京見物は、近世同様伊勢・京都・奈良見物の一環として行われるのが一般的であったが、明治後半には東京見物を目的として上京し、一週間前後滞在するパターンが増加してきたのではないかと考えられる。特に東京以西の地域から東京へということになれば、東京見物を目的としていたといっていよう。ここでは滞在型の東京見物の実際の記録を示すことができないため、渋川玄耳(柳次郎)の著した『東京見物』をもとにしてみたい。

『東京見物』は渋川玄耳が東京朝日新聞に連載したものを、明治四十六年六月に夏目漱石の序を添えて金尾文淵堂から出版。その後四十三年十一月に東京の外に鎌倉見物・京都見物・奈良見物・大阪見物・神戸見物・朝鮮見物を合わせて一冊とし、『野東京日本見物』と題して有楽社から出版、さらに大正六年六月に世界見物を加えて『野東京日本と世界見物』の書名で誠文堂から出版されている。ここでは有楽社版の『野東京十

『日本見物』所収の「東京見物」を底本とした。

本書の主人公藪野棕十は地方城下町の在村法楽寺村の名士で、冒頭新橋駅に着いたところから、その地域は東京以西を想定しているようである。ちなみに著者渋谷玄耳は佐賀県の生れである。

東京見物の第一番の目的は東京勸業博覧会を見ることであるから、年代は明治四十年で季節は田植前、約四〇日間滞在している。滞在先は甥の荻野花太郎の下宿風雲館で、その所在地は麴町三丁目である。

右の設定から分るように本書は同時進行で記されたものであるから、その内容は現実と掛け離れたものではなく、実際にこのような東京見物があったとみてよいだろう。但し四〇日余の滞在というのは東京の細部も読者に知らせたいということから、日数を長くしたのだろう。

新橋に着いた棕十は人力車で甥の下宿へ向うが、この間東京の見るべき所を組み入れている。電車・銀座・江木写真店建物・高架鉄道・日比谷公園・皇居そして下宿に到着し車代を払うが金が不足といって五銭余分に取られている。名所を挙げているといってもすべてを誉めているわけではなく、譬えば日比谷公園などは「我家の裏山よりズツとつまらん小つぽけな雑木がある許り、皆んなブツた伐った処で、我家の一年の風呂の燃料にも足るまい。」といった調子である。

棕十は下宿に到着するが甥と約束した日より二日程早く到着したため甥は不在で翌朝帰宅する。翌朝から東京見物をしたり、下宿で過ごしたりしているが滞在中の見物地を掲げておこう。

国会の傍聴

地元選出議員の様子を見ることが目的であったが、地元議員は議場で鼻糞をほじっている。

上野・東京勸業博覧会

台湾館・第一会場一号館・美術館・活花陳列場・第二会場の人魚等を見るが時計をスラれる。

浅草・皇居周辺

仲店・浅草寺・凌雲閣、下宿の娘「つうちゃん」十歳を連れて見物。仲店で棕十がもたもたし通行人になぐられる。丸の内煉瓦街・馬場先門。

芝

泉岳寺・増上寺。この時は棕十が一人で行動。増上寺を出た辺りで「大乗生命保険株式会社専務取締役、東洋有益事業株式会社監査役、聖哲大学創立委員」の肩書を持つ笹栗広雄と出逢う。笹栗は法楽寺村西念寺の小僧であったが還俗し、青年実業家として活躍中で、棕十は笹栗に料亭で接待を受けている。

花見

隅田川辺―向島・三囲神社。小松島より川蒸気に乗る。荻野と共に花見をし、荻野は夜桜見物つまり吉原見物を勧めるが棕十はこれを拒否する。

芝公園

婦人博覧会・大道芸で犬と猿の芝居を見る。荻野と一緒に。

三越・歌舞伎座

法楽寺村新兵衛の跡取娘山延稗子が訪ねてくる。稗子も東京の学校に通っている。その稗子と共に見物。

寄席

荻野・つうちゃん・つうちゃんの母親と共に京橋の寄席へ。途中天賞堂のイルミネーションと店内を見て回る。

以上が実際に見物したところであるが、まだ幾らも見物ができていないと歎き次のように書いている。

四十日近く東京に逗留をしていまだ幾干の見物も出来ぬ。帝国大学、女子大学、白痴院、盲啞院、幼稚園、子守学校等の珍しい諸学校は是非参観せねばならぬ。谷中、青山の墓地に過去の英雄、高士、俠

客、名妓を弔らはねばならぬ。現在の貴紳、富豪、文人、隠者にも御意を得て置きたい方がある。監獄、裁判所、兵営、諸工場の内部も見たい。本願寺、ニコライ堂、救世軍本営、天理教会にも詣りたい。

其他まだく往きたい処が有る。其より何より第一に御不沙汰を為て居るは旧藩主の御屋敷ぢや。次に同県出身の誰彼にも未だ訪問を怠つて居る。笛村に山元、田丸に飛鳥、佐々木、須田川、森、樋山、是海和尚に頼洲先生、何方にも推参して東京の神官、軍人、教師、職工、商店、卜筮、医者、戯作者、各種の家庭の模様も見物致したいと目論んでいたが、いやもう根から撈どらぬ日記を書くので時間が潰れるのぢや。苔野やつうちやんを道伴に為るから埒が明かんのぢや。

これから一気に速く駆け回ってしまはねば、追付け間もなう田植時に差かゝつて来る。さあ是から早速実行ぢや。

東京見物に來た人の興味や関心・階層等により見物の対象も変わってくるだろうが、明治期の人々が興味・関心を示す代表例が列挙されていくとみてよいだろう。各種学校や監獄・裁判所等々単に建造物を見るだけではなく、そこに新時代の息吹き——といっても掠十の東京見物は明治四十年のことではあるが——そして首都東京を見ようとしたのだろう。さらに旧藩主は地域の象徴としてみられていたこと、精神的な拠り所となっていたことが分る。尤旧藩主と地域住民の關係はこのような表現で処理できるものではないだろうが。

(2) 滞在型東京見物の背景

滞在型の背景をみる前に著作物から大正・昭和の東京見物をみておきたい。

生方敏郎の『東京初上り』⁽³³⁾は東京以北の養蚕が盛んらしい村（生方は

群馬県沼田生れ）に住む本右衛門と妻のお芋、そして末娘のおとめを伴い東京平和博覧会（大正十一年）観覧がてら東京見物にやってきている。滞在先は東京の護国寺付近に住んでいる甥夫婦宅であるが、前以て連絡したわけではなく突然の上京である。

田唐伝三著の『新東京俺らが見物』⁽³⁴⁾は東京を五日間で見て回るための案内書であるが、東京に住む息子が父親を案内するという形式で書かれている。父親は某村の村長を二五年勤めているが、その勤続のお礼という事で村人が費用を出し東京見物を行ったという設定である。息子は大学卒業後東京の「会社員様」になっている。住居は東京の郊外——中央線沿線のような——で妻と二人暮らしをしている。上京したのははしがきに「六年振で金屑のやうな焼土の中から新しい都が出来た……」「復興の東京を見にゆく」などあるから、昭和三年のようである。

明治・大正・昭和と時代は異なるが、滞在といっても親戚や息子之家に泊っている。費用の懸かる旅宿ではなく親戚に宿泊することにより滞在型の東京見物が容易になってきたとみるわけである。なお本稿とは直接関係はないが、甥の家泊るということに興味を惹かれる。息子や娘ではなく甥というところに何かがあるのだろう。さらに突然または約束をしてもそれを無視して訪れても許される社会状況であった。

近世の江戸の人口は最盛期には一三〇万人程に達したといわれるが、幕末維新期には六〇〜七〇万人程に減少したという。その後東京の人口は増加していくわけであるが、増加の内容はそのほとんどが地方からの転入者で、自然増の占める割合は極めて少数であったろう。

地方から東京に移り定住することにより、地方在住者は東京に親戚ができるわけである。地方からの転入者の増加は、故郷というか田舎をもつ東京人の増加ということでもある。

定住ということではないが、東京の学校で学ぶための東京暮らしがある。これは基本的には近世にはなかったことである。各種学校の増加は

それだけ地方からの東京流入者を増加させることになるわけである。こうした社会状況を反映して各種の「東京遊学案内」が出版されている。学校案内関係の著書は明治二十年代には既に出版されていたようだが、ここでは明治三十八年発行の『最新東京遊学案内』^⑤と『女東京遊学案内』^⑥をみてみよう。

『最新東京遊学案内』は三編からなり、第一編は東京で学ぶにあたっての諸注意、第二編は学校紹介、第三編は入試問題であるが、主要目次を掲げておこう。

第一編遊学者ノ注意

- ①上京ノ準備 ②遊学者ヘ注意 ③遊学ノ目的 ④着京ノ注意
(各地から東京迄の鉄道旅行) ⑤宿所ノ撰択 ⑥監督ノ必要
- ⑦学校ノ撰択 ⑧入学者ノ心得 ⑨学費の概算 ⑩修行ノ年限
- ⑪着京後ノ心得 ⑫衛生上ノ心得

第二編各種学校規則

- ①陸海軍諸学校 ②政治法律経済学校 ③農工商学校 ④外国語学校 ⑤医学薬学校 ⑥国語漢文学学校 ⑦簿記速記学校 ⑧雑種諸学校 ⑨官公私立中学校 ⑩各種女学校

第三編諸官立学校入学試験問題集

本書を通覧すれば、東京での学生生活から各学校の内容そして一部学校の入学試験問題例に至るまで知ることができるわけである。尤本書の入試問題集が役に立つかどうかは疑問であるが。

『女東京遊学案内』も前掲書とほぼ同じ構成だが、活字は小さく第一編にあたる「遊学者の注意」は僅か八頁で、学校案内の部分が充実し、授業内容まで掲載されている。

ここに紹介したのは明治三十八年出版の二冊であるが、同様の遊学案内が何種類か発行されていたのだろう。

地方から東京へ、特に若者達にとって東京は憧れであり、さまざまな

理由をつくっては東京へ出る機会を狙っていたのである。東京に出る理由として東京で学問をするという大義名分は、経済的理由を別にすれば周囲を説得する強力な手段である。『最新東京案内』第一編第一章の「上京ノ準備」の冒頭には

東京ハ帝国ノ首府ニシテ學術技芸ノ淵藪ナレバ教育機関ノ設備至ラザルナシ茲ヲ以テ苟モ社会ニ雄飛セント欲スル者ハ先ズ笈ヲ負フテ東京ニ来リ学バザルモノ少ナシ

と地方から東京へと若者を煽動する一方、第二章では東京で暮らしていく心構えを説いている。

政治ノ府タル東京ハ又學術ノ泉源タリ年々笈ヲ負フテ学ブ者万ヲ以テ算フ而モ其能ク目的ヲ達シ成功ヲ完フスル者幾何ゾ剛毅ニシテ摯実燕趙悲歌ノ士ノ如キ者モ足一タビ帝都ノ地ニ容ルレバ当年ノ意氣頓ニ消磨シ尽シテ身ハ忽チ淫逸ノ群ニ入ル蓋シ物質的ノ開化ニ伴フテ誘惑ノ具備ハレバナリ

多くの誘惑を克服し、所期の目的を果すことは容易なことではないが、地方から東京へ毎年「学生」が供給され、それが肉親・親戚が東京見物に出向く機会をつくることになったわけである。

③東京市民の行楽

(一) 東京人のための東京案内

先にも少し触れたが明治三十年代頃になると東京案内書に変化がみられるようになってくる。東京の案内書は東京見物に上京した観光客を対象としたが、東京人のための東京案内書が出版されるようになったことである。『明治期刊行図書目録』によりそれとみられる著書を挙げてみよう。

大橋義三著刊『東京古跡誌』——「名古」——「墓の露」—— 売捌人山本鑑蔵 明治三十一

年六月

大町桂月著『東京遊行記』 大倉書店 明治三十九年八月

——『東京近傍避暑避寒案内地図』 博愛館 明治四十三年三月

落合昌太郎著『郊外探勝その日帰』 有文堂 明治四十四年六月

安川了編『東京名勝古蹟便覧』 東京名跡社 明治四十五年三月

戸川残花著『江戸史蹟』 内外出版会 明治四十五年四月

——『東京近郊遊覧案内』 毎日新報社 明治四十五年五月

右の著書は東京に見物に來た観光客が手にするという性格のものではない。『東京古跡誌』は著名人の墓所の所在地と解説を付した掃苔録である。著名人の墓所を見て回することは近世にも行われているし、東京見物にも組み込まれてはいる。泉岳寺の赤穂浪士の墓に詣るのはそのよい例だが、東京人が著名人の墓を多数見て回るようになってくる。

戸川残花の『江戸史蹟』は各区に残る史蹟を多数列挙し解説したものであるが、東京見物の観光客にとっては詳細過ぎるものである。本書は歴史に興味を持つ東京人が市内の歴史を尋ねて歩く時の本とみなすことができる。歴史に興味を持つという固苦しい表現になってしまいが、もう少し気軽なそして行楽を兼ねたような史蹟巡りというところであろう。

江戸は幕末維新期の激動を経て東京となり、その後関東大震災・戦争・東京オリピックそしてバブル経済期と東京は破壊され変貌を遂げた。変貌後人々に訪れるのは過去への郷愁であり、こうしたことを契機に江戸・東京の歴史を書いた著書が多数発行されている。

明治四十年代は幕末期に二十代の人々が六十代に入る頃でもあり、江戸への郷愁または消えていく江戸への思いがこうした著作の出版につながっていった。『江戸史蹟』の巻末新刊紹介には篠田鑑造の『幕末百話』の宣伝が載っている。

このような東京を知る案内書に対し、東京の近郊案内書が出版される

ようになった。これもまた東京人のための案内書である。ここでは大町桂月の『東京遊行記』を取り上げてみよう。本書の序は東京人に対し東京の近郊を巡るといふ新しい行楽を提唱している。

序

謹んで学生諸君に示す。郊外に出で、新鮮の空気を吸ひ、交通の機関以外、草鞋を利用して脚を健にし、身軀を健にし、精神を健にし、懦弱驕奢の風に染むことを避くるは一の必要なる修養也。書物の中にのみ人生問題を求めず、ひろく人間を観察し、自然を観察し、歩いてく歩きたぶれたらば、厭世だ、煩悶だ、恋愛だ、失恋だなどいふ、けちな考は起らざるべし。

謹んで、東京の人士に示す。東京を中心にする近郊の勝景は、ほ、探りつくし、東京の特色を発揮したるつもり也。

謹んで、東京を知らむとする地方の人士に示す。市内を歩くは、余の好まぬ所なれど、東京見物の大要は、ほぼ尽くしたるつもり也。

謹んで、世の紳士に示す。電車の便は、人を不具にす、酒樓にのみ快楽を求めず、茅店の濁酒の趣味をも解し、自然美の趣味をも解せられむことを希望す。

謹んで、世の婦人に示す。家にのみくすぶりて、くさくさする氣を芝居、寄席のみにはらずに、郊外の霊地、勝地にもはらし、姑や夫の讒訴以外、高尚なる話柄を得られんことを希望す。

謹んで、世の詩人に示す。西行の如き、芭蕉の如き、高潔の詩人といはる、人は、いづれもみな旅行を好みたるの人也。

謹んで世の老人に示す。殺生を好まる、ならば、川に魚あり、森に鳥あり。花笑ひ、鳥歌ふ自然の美に、しばし己を没し給へ、氣がのびのびして、腰の皺もいくぶん伸びべし。

謹んで、世の老夫人に示す。毎日同じように、孫を甘やかす、嫁をいじめずと、八十八ヶ所詣でもして、後世を祈り給はずや。

右の文中地方人士のための東京見物の大要も記してはあるが、桂月自身市内を歩くのは好まぬと書いており、本書は明かに東京在住者向けの郊外案内書として執筆されたものである。本書には東京市内の案内が含まれてはいるものの、その中心は郊外であり、最後の第四三〜四六までは東京の八十八ヶ所詣である。さらに結論において徒歩の必要、真の遠足家、遠足に付随する趣味等についても述べている。

本書が刊行された背景として二つのことが考えられる。一つは同時代の日本における文学からの影響である。よく知られるように、自然主義の「自然」は、所謂自然ではなく人間の本性その他を意味するものであったが、同時に自然主義の作品が背景描写等に優れ、それを確立した点は無視し得ない。たとえば国木田独歩の『武蔵野』はそれを代表するものである。こうした潮流に乗って桂月は『東京遊行記』を執筆刊行したものとみてよいだろう。この場合安易に田園とか郊外という語を使うべきではなからうが、桂月も西欧の文学者の描いた田園風景に対する憧憬から、東京近郊の風景を重ね合わせようとしたのだろうか。さらに『東京遊行記』の遊行または遠足ということもピクニック——是も甚だ曖昧な使い方ではあるが——という言葉に置き換えて考えたほうがよいのかもしれない。

もう一つの理由は東京在住者、それも地方出身者が主となって旧来の江戸的なものを基盤とした遊びの場、行楽地とは異ったものを強く求めたということである。地方出身者も東京に定住してからは主として近世以来の遊興・行楽の場所に足を運ぶことになる。明治の東京市内は現在と比較すれば自然的景観や田畑があちこちに見られるところであったが、地方出身者にとっては家屋が建ち並び、何処へ行っても人が沢山いる所として映じたであろう。こうした環境に年と共に馴染んでいっても、多くの場合その中に浸りきることはできず、自分自身にとっての原風景を潜在意識下で求めているのではないだろうか。そこに登場したの

が装いも新になった東京近郊の行楽である。

東京の近郊に遊ぶことは近世にも盛んに行われ、近代に入ってもそれは引き継がれるが、江戸それも下町の色を強く持つものであった。しかし東京の近郊は鉄道の発達や人口増により範囲が拡大し、近世の江戸住民にとっての近郊の多くが姿を消していくことになる。「残された近郊」「新しい近郊」を歩くということは単なる田舎道を歩くということではなく、自然・田園という薄絹が被せられた。

ところでこのような行楽は主に地方出身者が支持したと記したが、地方出身者といってもそれは当然限られた階層である。東京近郊の行楽は官員や会社員など中流階級に受け容れられていったとみられる。大雑把に言ってしまうと山の手の人々である。こうした中流階級を中心に家族そして家庭という意識——先に述べた田園同様家族・家庭の概念規定をするべきだが、ここでもまた抽象的に使用した——が生じたこともあるだろう。家族揃っての郊外での行楽は下町生活とは相容れないものであった。

下町と山の手については諸書に語られているが、ここでは鐙木清方の『明治の東京』⁽⁹⁷⁾「山の手と下町」から引用しておく。

明治維新の後、山の手だってそう武家上りばかり住んでいたわけではなかったけれど、そこには旧幕時代と違った新しい支配階級、官員さんが武士に代って住むようになった。

官員にも都会人がまるでないのではないが、多くは昔の江戸の人が「勤番者」だの「新五左」だのと侮蔑した田舎者の成上りで、高位顯官といえども、その趣味性に到っては、生地⁽⁹⁸⁾の田夫野人に過ぎないというのと、江戸はなんといっても公方様御膝元、若いものは時世に順応しても、江戸に生れた人たちは、時めく薩長のえらい人たちに、大義に名を藉りて、徳川家を倒した赤っ面ぐらいな反感を有たぬものはないのだから「のて」に対する悪い感じは、ここに

至って、江戸の時より、更に強くなっていたともいえる。

と書く一方、下町の人は幕政も朝政も大した関心も持たず、まして子孫達は自分達の住んでいる所が下町と呼ばれていることも知らなかったし、山の手なる存在もまるで弁えなかったとも書いている。

下町・山の手といっても厳密な境界があるわけでもなく、制度・行政の上での規定であるわけでもないのに、書き手によってさまざまに変わるが、下町と山の手が異質の空間として書かれていることだけは共通している。しかし俗に江戸ッ子といってもそれは年と共に少数派になり、下町にも多数の地方出身者が入り込んでいる。現在でも下町・山の手の影響は拡大し続け、渋谷・世田谷方面迄もが山の手となり、帝釈天信仰で知られる葛飾区の柴又辺りまでもが下町などと呼ばれるようになっており、今なお両地域が異質なものとして意識されている。意識されているだけで実態を分析したらどうなるかは別問題である。

薄絹を被った東京の近郊は「案内書」という観点からだけみると、大正に入り田山花袋によって「花開く」ことになる。しかしそれは東京の近郊が等しく花開いたわけではなく、東京の西部としての武蔵野である。そこには江戸・東京の山の手・下町の形骸もなく、花袋は徹底的に東京の西部を賛美したのである。

(2) 田山花袋と東京近郊

①花袋の東京近郊概観

薄絹をまとった東京の近郊は「案内書」という観点からだけみると、大正期に入り田山花袋によってより一層喧伝されることになる。しかし花袋にとって薄絹をまとった美しい東京の近郊とは、東京の西郊の武蔵野であった。

明治から大正にかけての旅行案内書を語る上で最も重要な人物は田山花袋である。花袋は野崎左文が中心となって編した本格的な案内書『日

本名勝地誌³⁸⁾の編集に携わり、その後これを簡略化した『新撰名勝地誌³⁹⁾の編者になっている。その外にも多くの旅行案内書を執筆出版しているが、東京の近郊を案内したものとして知られるものは『東京の近郊⁴⁰⁾』『一日の行楽⁴¹⁾』『東京一日の行楽⁴²⁾』で、いずれも携帯に便利な小型の本である。

花袋は小説家としては著名であるが、紀行文作家・旅行案内書作家としてはあまり知られていないようである。特に旅行案内書については研究対象としてほとんど取り上げられていないこともあり、現在では広く知られていない。しかし花袋の文章が明治・大正期の多くの人々に影響を与えたとすれば、小説などより紀行文や旅行案内書の方がその比重は大きかったであろう。

彼の文が影響を与えた一つとして東京近郊についての認識、及び好ましい東京近郊像があるが、花袋自身が好ましいと認識していた東京の近郊とは武蔵野である。武蔵野といえは花袋よりも国木田独歩であり、独歩の文学作品などを讀まなくとも独歩⁴³⁾武蔵野の図式が成立する程である。これに対し花袋は旅行案内書において武蔵野を喧伝した。文学作品とは異なり、旅行案内書には武蔵野の何処へ行けばよいかが具体的に記されている。独歩が読む人に武蔵野の景観を頭に描かせる役割を果たしたとすれば、花袋はそこへ入り込むための案内人としての役割を果たしたわけである。

武蔵野を賛美し喧伝する一方、花袋にはどうしても馴染めない地域があったようである。それは東京湾に沿った辺りで、かなり露骨な表現をとっている。花袋と同時代に出版された東京近郊の案内書は当然であるが、その影響力は花袋を抜くものではなかったろう。

花袋の東京近郊に関する認識を見る上で最適の著書が『東京の近郊⁴⁴⁾』である。本書は上篇と下篇からなり、上篇は「東京と其近郊」と題され、東京近郊の総論及び東京近郊の四地区（西郊・北郊・東郊・南郊）の紀

行文的な案内になっている。下篇は近郊への具体的な案内である。ここでは上篇によって花袋の東京観を概観してみよう。なお注の無い引用文はすべて『東京の近郊』である。

武蔵野に対する認識などというより、狂信的なまでの武蔵野への思いを花袋は「武蔵野の背景」に次のように記している。

武蔵野は私に取っては忘れられないところである。何ういふ意味から考へて見ても、面白い興味のあるところだと私は思ふ。武蔵野の風や、雨や、雪や、丘や、川や、さういふものを考へると、自然の大きさがしみじみ体に迫つて来るやうな気がする。日本でも他にはこれほど興味のある歴史を持ち、これほど変化した地形を持ち、これほど複雑したカラアを持つてゐるところはない。日本の唯一の古い都である京都でも、武蔵野ほどすぐれた味を持つてゐないと私は思ふ。

と最初から派手派手しく武蔵野を賛美し、しかも京都と比較してしまっている。花袋は武蔵野にスポットライトをあてる必要からか、どうしても京都との比較をしたかったやうで、第三章に相当する「林の趣味と水郷の美」においても、次のように書いている。

私は曾てあちこちの郊外を研究して見たことがあつた。流石に京都の郊外は好かつた。歴史の址が到る処にあつた。それに山にも水にも近かつた。嵐山や東山や祇園や、あゝいふところは東京には見たくても見られないものである。それに京都は、山で四面を囲まれてゐるだけあつて風気が饒い。水にも豊んでゐる。しかし、東京の郊外のやうなあら削りな、素朴な、太古の佛を存してゐるやうなところがない。到る処に人工が加つてゐる。加はりすぎてゐる。山などでも矢張さうである。それに比べると、東京の郊外は広くつて大きい。

東京と京都の近郊の比較、それも彼のような意識に基づいた風景論か

ら同じ土俵に上るものであらうか。較べようもないものを較べているのである。「太古の佛」・「人工」というが、同じ自然主義の徳富蘆花は『自然と人生』^④の「雑木林」の中で東京の西郊＝武蔵野の林のことを次のように記している。

余は斯雜木林を愛す。

木は檜、樺、樺、樺、榎など、猶多かる可し。大木稀にして、多くは切株より簇生せる若木なり。下ばへは大抵綺麗に払ひあり。

花袋が賛美する武蔵野の風景を構成する一つである林は、蘆花の文からも分るやうに、武蔵野農民達が薪や炭を作るために手入れをした人口の林である。

②花袋にとっての東京近郊

花袋は東京近郊を「丘の西郊」、「田の北郊」、「川の東郊」、「海の南郊」に分け、東郊は隅田川を境にしてその東、西郊は板橋から渋谷・目黒辺りを起点に扇のように先を開いて見た区画、北郊は千住・赤羽付近、南郊は京浜電車の通る大森・川崎辺りとしている。そして花袋は武蔵野の範囲について次のように定義している。

東京の近郊といふことは、狭い意味でいふと東京の接続地であるが、広い意味でいふと、武蔵野をすべてふくんでゐるといふことになるのである。

武蔵野即ち東京の近郊である。

武蔵野を流れてゐる川が二條ある。北にあるのが荒川で、南にあるのが多摩川である。この二つの川があるために、東京の近郊は何んなに色彩づけられてゐるか知れないのである。そしてこの二つの川の間に、主なる武蔵野は横つてゐる。

花袋自身は一応武蔵野を広い範囲で把握しているが、実際には狭義の武蔵野として「丘の西郊」を位置付け、武蔵野は都市の拡大に伴い後退

している」と書いている。

『東京の三十年』⁽⁴⁴⁾の「その時分」によると、銀座の本屋に小僧として勤めていた時代の花袋は、時として駒場の農学校まで使いに行くことがあり、その当時のことを次のように述べている。

しかし、宮益の坂を下りると、あたりが何処となく田舎田舎して来て、藁葺の家があつたり、小川があつたり、橋があつたり、水車があるにめぐつてゐたりした。私はそこを歩くと、故郷にでも帰つて行つたやうな気がして、何となく母親や祖父母のゐる田舎の藁葺が思ひ出された。小さい私は涙などを拭き拭き歩いた。

早い時期に故郷を離れた花袋の目に映じた渋谷周辺の風景は故郷を思い起こさせるものであり、このような風景に彼が思い入れを強くするのは当然のことであろう。しかも長じて自然主義の中で武蔵野が脚光を浴びる、というより脚光を浴びせる立場にいたわけである。

花袋の故郷と重なる武蔵野は東京近郊の都市化により年ごとに後退していくが、『東京の近郊』の冒頭で彼は次のように書いている。

私の今住んでゐる処は、江戸名所図会に代々木野、代々木村などとしてあるところである。つまり千駄ヶ谷から丘陵を隔て、一面はずつと駒場の方に、一面は甲州街道から高井戸の方まで連つてゐる地区を指してゐるのである。私が此処に初めて居を卜してから、もう十年近くになるが、この間の変遷は実に夥しいものである。都会の膨張力は絶えず奥へ奥へと喰ひ込んで行つてゐる。

西郊＝武蔵野を好んだ花袋であるが、小林一郎は現代教養文庫版の『東京近郊一日の行楽』⁽⁴⁵⁾の解説において『東京の近郊』について次のように述べている。

しかも、大正五年一月一日の『文章世界』の「文界消息」に「田山花袋氏は、実業之日本社より出版する著にて『武蔵野』を執筆中である。」と書かれていることによつても分る通り、これは最初は「武

蔵野」という題名で出版する予定であつた。明治二十九年の末から親しくなった国木田独歩の『武蔵野』（『国民之友』、明治三十一年一～二月）を意識していたと言えるし、その叙述の方法は『日本一周』（大正三年～五年、博文館）と『東京の三十年』（大正六年六月、博文館）の中間に位置するものとも言える。

これによれば本書は初め『武蔵野』と題する予定であり、国木田独歩を意識していたという。ここでは花袋の著作を文学の立場から見ようとは思わないし、専門外の著者にとってそれはまた無理なことである。そのため本稿においては『東京の近郊』『一日の行楽』『東京近郊一日の行楽』などを旅行案内書または行楽案内書としてみてゐるし、それが妥当ではないかと考えている。しかし花袋研究者、文学研究者はあくまでも紀行文として扱っているようだ。

それでは花袋の書く東京近郊を具体的にみていくことにしよう。『東京の近郊』では丘の西郊、田の北郊、川の東郊、海の南郊と続くが、丘の西郊については北郊・東郊・南郊を語る中で取り上げていくことにする。それは西郊以外の郊外の文はすべて西郊との比較で語られているからである。

田の北郊の概要を見てみよう。

北郊は西郊に比べると、少々趣が違ふ。

私の言ふ北郊は、西は中仙道を境とし、東は千住の奥羽街道を境として、扇状に北に向かつてひらけて行つたところを指してゐるのである。半は丘陵と谷と相交錯し、半は東郊に似た河川縦横の平地を以つて成立つてゐる。しかし、この丘陵と谷とが決して西郊に見るやうな独立した形を成してゐない。丘陵としても、かなり大きい。寧ろ台地と言ふ方が適當してゐるかも知れない。

西郊と比べると、概して人家が多い。人烟も稠密してゐる。西郊は殆ど田がなくなつて畑ばかりであるが、此方は畑よりもむしろ水田

が多い。畑はむしろ西郊に接した部分にその多少の発達を見るばかりである。武蔵野の一部は一部であつても、都会化された武蔵野と言つたやうな感じのするところである。

右の文からよく分るように西郊との違いを評価するのではなく、あくまでも西郊がいかに素晴らしいかを述べるために北郊を引き合いにしているに過ぎない。

武蔵野の雑木林、日影、風の音、朝霜、萱原、氷などの美は、到底この方面には求むることは出来ない。

これなどは無理矢理西郊を讃めているというしかない。

川の東郊―現在の台東区・江東区・江戸川区・葛飾区そして千葉県の市川・行徳を中心とした地域は、近世以来江戸の文人墨客を初め多くの人々が行楽に訪れた地であるため、花袋もとりあえず評価する。

東郊は西郊と共に、都会の人士の遊びに行くのには最も適してゐるのを私は見る。地形も感じもすつかり西郊とは趣を別にしてゐる。西郊が山の郊外、丘の郊外、林の郊外であるのに対して、東郊は水の郊外、沮洳地の郊外、白帆の郊外であることは既に前にこれを説いた。

というように行楽地として最適であることを認めているが、矢張り随所に西郊との比較が見られる。東郊の魅力の一つは江戸川沿いの風景であり、国府台がその中心的存在であるが、これについて花袋は「丘の西郊」の中で次のように書いている。

百草は郊外で聞えた好眺望の地である。東では国府台、西では百草とは、昔から言はれてゐるところである。二つを比較して見ると、国府台は海と川との眺めである。百草は山の眺めである。しかし、武蔵野を見ようと思ふには、後者却つて前者に勝つてゐる。

これもまた較べようもないものを較べ、無理矢理西郊に軍配を挙げてゐるやうなものである。しかし彼は「川の東郊」をそれなりに賛美しな

ければならない理由があつた。そのキーワードとなるのが芦荻である。彼は随所に芦荻を登場させ、芦荻の茂る景色を称えているが、「川の東郊」では場合によっては一頁に何度も芦荻が登場する。

芦荻は河川湖沼の岸辺に繁茂するが、花袋にとって芦荻は河川湖沼の象徴であつた。彼は市川から中山にかけての桃林の辺りについて、

この街道―市川から中山に行く街道の裏手は、所謂東京の汽車の停車場や電車の中にいつも広告されてゐる中山市川の桃林で、畑の中に処々に散在してつゞいてゐるのを見る。しかし田疇の間で、別に沼も水もないので、それほどすぐれてゐると思われない。

と書いている。日本人の多くは風景の中に水を求めたようだが、花袋もまた同様であつた。しかし花袋の場合単に水の風景を求めていただけではなく、水の風景は故郷の風景「館林」につながるものであり、それは彼の原風景でもあつた。渡良瀬川や周辺の池・沼は花袋にとっての原風景を構成する重要な要素であつたと推測される。花袋自身も東郊の林や若葉は西郊の美しさに比すべくもないが、水郷・沼沢の美は西郊ではみることができないと述べている。

花袋は水のある風景を賛美するものの、その水とは基本的には故郷館林を想起させる水辺の風景―淡水であつたようだ。そのため『東京の近郊』においても海に関する記述は少なく、特に房総方面の海辺には嫌悪さえ抱いていたのではないかと思わせる表現があるが、「海の南郊」の記述をみてみよう。

従つて、南郊では防風林など、いふものが発達してゐない。雨も西郊北郊のやうに斜に降らない。東海道の一路の通じてゐる海岸地方は殊にさうである。カラアから言つても、湾内に淀んだ海岸の空氣の重く巴渦を巻いてゐるやうな感じのするところである。

花袋が嫌つたのは東京湾だけであつたともみられるが、次に「川の東郊」の中では次のように書いている。

行徳町に行くには、例の高橋から出る汽船で行くのが一番好い。しかし、一の江あたりから行くとすると、上今井の渡をわたるのが順路である。こゝを渡ると、向ふはすぐ南行徳町になってゐる。小利根の土手にひた／＼とくつついてゐるやうな町で、一面漁村一面農村と言つたやうな趣のある町である。河港としての気分も無論雑つてゐる。東京の近郊では特色のある町の一つであることは争われない。

しかし不思議なもので、気分は川一つ越えたばかりで、すつかり下総の気分になってゐる。言葉なども、船橋、馬加、稲毛あたりで使ふ一種の訛のある言葉である。住民の姿態なども矢張さうした粗野な海岸近い漁村の民のそれに似通つてゐる。

明らかに海または東京湾を嫌っている表現だが、特に房総半島側に嫌悪感でもあるらしく、『東京近郊一日の行楽』になるとその表現はより一層直接的になり、「房州行き」の中では、

房州の海岸は、私は余り好まないけれども、それでも行つて見るべきところは沢山ある。鋸山、洲の崎、那古の観音、布良、白浜の燈台、清澄山、小湊の誕生寺などその重なるものである。

(中略)

房州海岸の一带の調子は、イヤに野卑な調子の低いところがある。大して人氣がわるいと言ふではないが、何処か赤く爛れたやうなところがあつて、気分が緊張してゐない。物価は安く、魚は多いが、向こうも世離れた気分に乏しい。それと言ふのも矢張、都会の生半可な影響を海を越えて受けてゐるからであらうと思ふ。

以上の引用文に対しては特に説明も分析する必要もないだろう。このような表現をするというのも自然主義文学者としては当然のことなのだろうか。どちらにしろこれでは旅行案内書を使って東京湾沿や房州には近づかぬ方がよいと言っているやうなものである。但し芦荻が茂り、淡

水である利根川・江戸川・手賀沼・印旛沼等は別である。

東京市街の発展により、近世以来の東京の手軽な日帰り行楽地は次第に姿を消していくが、その一方鉄道をはじめとする交通機関の発達により、近世には一日がかりまたは一泊の行楽地が手軽な日帰り行楽地になっていった。

近世の行楽地はそのほとんどが江戸城から隅田川、東京湾に向う地域に所在し、丘の西郊は近世には行楽地がほとんど形成されなかった。それは丘の西郊の景観にもよるが、花袋はその丘の西郊に焦点をあてたわけである。『東京の近郊』における丘の西郊の描写の底流には丘の西郊を思索に耽ける場、自からの文学の背景を飾るに相応しい風景の展開する地との思いが強くあつたようである。丘の西郊の行楽地は従来の行楽地とは異なり、訪れた人が風の動き、木の葉の揺れ等に自から何かを見つけたところとして花袋は描いている。

行楽地としての丘の西郊を支えたのは、近代に至って東京に移住してきた「新東京人」を中心とした階層であつたとみられる。江戸・東京で生れ育った人々やその人々に育てられた世代は、東京がいかに変化しても近世的なものを引きずつた中に溶けこみ楽しむことができた。しかし新東京人がこうした中に溶けこむのはなかなか困難なことであつた。これに対し丘の西郊は江戸の粋も洒脱も必要ない。あえていうならば文人墨客にかわる新都市教養人の登場である。

花袋にしても表面的には東京に溶け込むことができたとしても、江戸・東京の伝統の中には溶け込むことができなかったであろう。

武蔵野Ⅱ西郊には行楽のための施設もその後多く作られるが、武蔵野という名称はブランド化し、行楽地から住宅地へ、それも川の東郊、田の北郊、海の南郊と比して知的な雰囲気のある閑静な住宅地として発展していく。下町同様拡大していくが、武蔵野の景観を残す地は後退し、景観的にはもと武蔵野というべき所もブランドとしての武蔵野に固執する。粗

野なイメージのない知的な、教養人の武蔵野である。

④ 学校関係編纂の東京・京都の案内書

(1) 東京と京都の案内書

近代において常に全国規模で観光客を集めることができた都市は東京と京都であった。大都市ということでは京都より大阪を挙げなくてはならないが、大阪は観光案内書でみる限り「大阪」と題した案内書は意外と少なく、多くは「京阪」「近畿」の中で語られている。

観光地としての東京・京都の特徴は明らかであるが、本論の便のために触れておくことにしよう。近代東京の観光資源は歴史的遺産は従であり、都市施設やそれに付随するものが中心である。一方京都は新しいものを積極的に取り入れる面はあるが、歴史的遺産が観光資源のすべてとあってしまってもよいだろう。

都市施設等を主たる観光資源とする東京は常に新しい観光案内書を作り出す必要性もあったし、それが可能であった。注目に値するものが登場すればそれがまた観光の対象になった。さらに関東大震災により東京の様相が変われば、復興した東京の案内書を作らなければならない。本稿では扱わない時代であるが、その後東京は戦災、東京オリンピックそしてバブル経済期とめまぐるしく変化していった。

これに対して歴史的遺産が観光の中心となる京都は、近世以来劇的な変化は遂げていない。但し歴史的遺産だけは幕末維新期に増大しており、「〇〇殉難之地」などの碑も町角に建っている。しかし基本的には『都名所図会』でこと足りる世界ではあるが、修学旅行をはじめ多くの観光客が毎年京都を訪れるため、各種の案内書が出版されている。

旅行案内書の編著者はさまざまであり、これもまた調査分析の対象となるものだが、学校・教育関係機関も旅行案内書を編集・出版している。

ここでは京都帝国大学学友会が発行した京都の案内書と、一高史談会が出版した東京案内について紹介し、若干の比較検討を試みたい。

(2) 京都帝国大学学友会発行の案内書

京都帝国大学学友会が京都の案内書を出版したのは大正四年のことである。書名は『修学旅行京都史蹟案内』であるが、本書の初版を見ることができなかったため、ここでは大正六年版を取り上げることとする。

本書の判型は文庫本程で、本文二六〇頁、外に年表・索引一八頁と地図二葉が巻末に折り込まれている。著者は西田直二郎と魚澄総五郎、監修は三浦周行で、発行者は京都帝国大学、発行所は京都市の宝文館である。

大正六年版の冒頭には大正四年版の「序」が掲げられている。序の執筆者は山川健次郎で、これにより本書の編纂経緯を知ることができる。

序

京都は千百年間の皇都にして、今尚ほ皇宮の所在地たり。(中略)全国諸学校の修学旅行を此地に試みるもの年中踵を接するは宜なりと謂ふべし。是等の旅行者中最も多数を占め、且つ教育上最も其必要を感じるものは中等程度の学校在学者なり。然るにこれが好伴侶たるべき簡明平易にして而かも正確なる案内記の未だ世に出でざるは深く遺憾とせざるべからず。余一日此事を以て三浦文科大学教授に諮りしに、教授も亦余と其感を同じうせられ、自ら編纂の体例を定めて同学の諸子に授け、京都史蹟案内を編纂せしめられたり。(中略)今より後、中等教員及び生徒等の此地に来るもの、これを以て指針となさば、其得るところ決して鮮少に非るべし。

大正四年十月

理学博士 山川 健次郎
書名そして序からもわかるように、本書は中等教育の教師や生徒を対

象に編纂されたものである。その構成は編纂方針にも記されているように、単に京都の名所旧跡寺社の解説をしたものではなく、京都を初めて訪れた旅行者がどのように市中を回ればよいかに意が注がれている。

先ず最初は「旅行日程表」ということで、日数に応じてどのように市内を見て回ればよいかが記されている。例えば一日程ということで三案が提示され、以下一日半程、二日程、二日半程、三日程及び郊外遠足一日程と懇切丁寧である。

日程に続いて「京都に於ける諸注意」「書目」「京都総記」「沿革細説」「美術の変遷」そして「各説」として市中を中央部、東、北、西、南に分け諸社寺等を説明している。

大正六年版の次には大正九年版⁴⁷が出版されている。その内容に大幅な変更はなく、附図等が特に訂正されているようである。内容に余り異動はないものの、活字の号数を大きくしているため、本文が三七八頁になっている。大正六年版はペーパーバックで表紙は色刷だが、大正九年版は白表紙で紙質がかなり落ちている。

その後どの程度改訂版が出版されたのかは定かではないが、昭和八年発行の「昭和八年版」⁴⁸は新書判をやや大きくした判型となり、カバーが付いている。その内容は基本的にこれまで出版されてきたものに変わりはないが、冒頭に御所建礼門・伏見桃山御陵・同東陵の写真が設けられている。

これ以降の出版状況は把握していないが、大正四年の初版出版以後本の体裁は変わるものの、少なくとも二〇年余り刊行され続けてきたわけである。

ここでは京都大学関係者を中心とした京都案内について述べてきたが、学校関係による京都案内としては京都府師範学校編の『京都之古今』⁴⁹の方が先行している。本書は大正二年の出版で、その冒頭に次のように記されている。

京洛の名勝史蹟に関する著述数多きも、其精なるものは細に過ぎ、簡なるものは疎に流れ、学生の修学半日の余暇を割きて、史蹟を探くるに便なるもの乏し。本会之を遺憾とし岡村英敏君に調査を委嘱す。君公務の余暇を割きて善く京洛の名勝史蹟を調査探究し、纏めて一冊子とし、名付て「京都の古今」と云ふ。

此書の成るや数を限りて印刷し、会員の有志に頒つこと、しも、本書の簡にして能く要を尽し、京洛の名勝史蹟を探るに至便なるを見るもの、相次ぎて残本の頒与を請ひ其止まる所を知らず。茲に於て更に訂正を加へ、書肆に托し剞劂に附して治く有志に頒つこと、せり。聊本書成立の由来を述べて序とす。

大正二年九月二十五日

近藤 為治

出版の主旨は学生達が余暇に京都の史蹟を歩くのに適当な案内書がなためであった。学生や校友会々員に配付したところ希望者が多く書店より出版販売するに至っている。附録には「如何なる予定にて京都を観るべきか」があり、一〇日案から始めて六日・五日・四日・二日・一日案が示されている。本書の構成からみて京都帝国大学校友会の『修学京都史蹟案内』は本書の影響を強く受けているようである。⁵⁰

(3) 一高史談会による案内書

京都においては京都大学関係者を中心となって京都の案内書が編纂出版されたが、東京においては一高史談会により東京を中心とした案内書が編纂出版されている。

大正十二年二月に出版された案内書の書名は『史蹟を探る人々』⁵¹で、奥附には著作者として一高史談会編輯代表者長沢規矩也の名が印刷されている。一高史談会と本書出版の経緯については本書の改訂版である『東京史蹟案内』の「序」に詳しい。

本会が大正二年の秋創立されて以来、其の事業の一として、実地の史的知識涵養のため折々東京郊外の史蹟を踏査研究することも、もはや数十回に上りました。其度毎に史蹟の現状や沿革等を的確簡明に記したテキストの必要を感じて居りましたが、それが動機となつて、終に従来踏査した場所の中から若干を選び、準備的に調べたことや、実地見聞したことなどについて、分担をきめて書き集めてみようとの議が会員の間に纏まりました。かくて曲りなりにも纏め上げ、これを会員が補正を試みて理想に近づけるための底本とし、且はまた広く同好の士の叱正を仰ぐ資にも供したいと、遂に印刷に付して世に出すことになったのが、さきに大正十二年の春刊行した『史蹟を探索の人々に（東京郊外篇）』なのであります。（以下略）

右の序にあるように、本書は一高史談会が現地調査・見学をした中から選り出した地域・場所を一冊にしたものである。また大正十二年発行の案内書は『史蹟を探索の人々に』であるが、扉には「東京郊外編」と印刷されている。本書の体裁はほぼ新書版だが背丸の布表紙装で本文四二三頁、付録二九頁で巻末に図と天皇の一覧が計九葉折り込まれている。本書には齊藤阿具・大類伸が序文を、今井登志喜は序として「東京の背景」と題した一五頁に及ぶ文を寄せており、「内容について」において本文の構成等の解説をしている。

（一）範囲 東京を中心に、東京川越間の距離以内の地域で多少出入りがあります。

（二）章別 一章略一日の行程で、三十を選び、南から右廻りに排列しました。

（三）執筆者 次の九人で、分担した章の終に署名しておきました。
石山乾二・鳥羽正雄・小笠原光寿・建部元春・中村栄孝・長沢規矩也・太田秀一・古谷善亮・迫水久常（イロハ順）。

本文の配列及び収録範囲は右の如くだが、目次により少し具体的に記

しておく。本文は品川方面から始まり、大井・大森・池上方面、子安・鶴見・川崎、小机、杉田・金沢までが一つのグループとみられる。次いで目黒方面から枋形城跡まで、中野・堀之内方面から瀧山・八王子附近まで、練馬・石神井から川越まで、駒込・王子・赤羽から百穴・松山まで、向島から千葉・小弓御所附近までの方面に分け記述されている。

その記述内容は、『^{修学}旅行 京都史蹟案内』とは全く異なるといつてよい。『史蹟を探索の人々に』は一高史談会の踏査をもととしただけであつて近世の地誌・古文書・金石文等を頻繁に引用し、実証主義的案内書であり広く一般大衆を対象として編集出版されたものとはいひ難い。そのため地域史研究の参考文献としては現在でも有用の書ではある。そうしたことを象徴するように、附録の一つに「参考書目録」が設けられており、これは江戸・東京関係地誌一覧ともいふべきもので、それぞれに解題も付され、「参考書目録」自体研究調査の手引きとなるものである。

大正十四年『史蹟を探索の人々に』は『^{史蹟を}探る 一日の旅』と改題して東文堂より出版されている。判型はほぼ同じだが、表紙には武蔵丘陵を意図したらしい風景が描かれている。東文堂主人の「改題の序」によると、

一高史談会編「史蹟を探索の人々に」を再版するに際しこれを「史蹟を探索の一日の旅」と改題せり、之れ他意あるに非ず、東京を中心に郊外一日の旅にふさわしき名所の史蹟を記して遺憾なきがためなり。本書は一高史談会の苦心に成るもの、上梓後好評、絶版なりしが、今度装を新にして題を改めて江湖に薦む。（以下略）

とあり、『史蹟を探索の人々に』は出版後二年前後で絶版となったようである。定価は『史蹟を探索の人々に』が二円七〇銭であるのに対し、『^{史蹟を}探る 一日の旅』は一円九〇銭と安価になっている。

東文堂版が版を重ねたものかどうかは定かではないが、昭和二年に至り古今書院より全面改訂版が『^{近郊}東京史蹟案内』として出版されている。「序」によると、東京郊外の発展及び震災による変化もあり「殆んど全く

稿を改め」という。判型は従来のもと同じで表紙は深緑色の布装で本文は二八八頁である。項目は従来ものが三〇項目であったが、本書は二五項目となっている。収録地域とその配列に変わりはないが、従来のものと比較すると省略された部分や削除された項目もあるが、その文はほぼ全文改められている。また従来のは今井登志喜の「東京の背景」が総説的役割を果たしていたが、本書では鳥羽正雄が「総説」を執筆している。絵図等は本文中に収録されているが、従来の「参考書目録」は「近世地誌関係書目」と改め、その解題はより専門的になっている。

その後一高史談会が案内書を出版するのは昭和七年のことで、書名は『大東京史蹟案内』と題し、判型も内容もこれまでのものは全く異なるものであった。B五判ハードカバーの箱付で、外箱には江戸城内図が刷り込まれている。

一高史談会が大正十二年に案内書を出版して以来再版及び改訂版が刊行されたものの、いずれも東京近郊を対象としたものであった。自序によれば市内の史蹟案内編纂は何度か計画されたようだが、なかなか実行に踏み切ることができなかった。以下自序を次に引用しておこう。

（前略）然るに今年は恰も本会の創立二十周年に当たりますので、その意義ある記念事業の一つとして、是非先輩の衣鉢を襲ぎ市内の史蹟案内を編纂しようとの議が会員の間に纏まりました。これはちょうど昨年の夏休みのことでありましたが、爾来、郊外編々纂當時の諸先輩特に鳥羽正雄・長沢規矩也・藤木邦彦三氏の御援助を仰いで、色々編纂の準備を進めて来ました。所が偶々今年十月からは懸案の大東京が愈々実現されることに決定し、東京附近の地図は全くその色どりが変わることになりました。この際大東京の史蹟案内を編纂する事は、上記の色々の理由から最も意義深きものと考へましたので、今年に入ってから計画を急に具体化し、遂に郊外篇の改定

と市内篇の編纂を同時に実行することに決定しました。

即ち従来の「東京近郊史蹟案内」の中、新に東京市となる部分は之を市内篇に繰入れて、交通路等にも大いに改定を加え、更に旧市内十五区の主な史蹟を実地について調査し、「大東京史蹟案内」として一冊の本に纏めることとなり、直に分担を定めて夫々踏査を進めました。（以下略）

東京市内をも含めた案内書刊行の最大のもとなったのは一高史談会創立二十周年であったが、昭和七年は東京市域拡大の年で、旧一五区から三五区になった年でもあった。

本書の構成は鳥羽正雄の総説に続いて市内篇、郊外篇が配されており、市内篇は三二〇頁、郊外篇は一六二頁でそれぞれ別に頁が付けられ、外に「江戸地誌解説略」「国宝目録」「索引」及び年号表が収録されている。江戸地誌解説が略になっているのは、本文の頁数が大幅に増加したため、写本等をほとんど省略したことによる。

『大東京史蹟案内』の刊行により、一高史談会が目指した東京の案内書はここに一応の完成をみたわけである。

京都の案内書は京都帝国大学が、一方東京の案内書は東京帝国大学が直接拘わることなく、一高史談会によって作られた。両者の間に何らかの関連があったのか、それとも単なる偶然であったのかは分らないが、その内容は大きく異なっている。京都帝国大学は中学校程度の学生が京都を見て回ることを目的として編集したのに対し、一高側は史談会の調査研究をもとにしたものである。しかも東京案内とはいっても当初は東京近郊を中心としたものであった。

これまで述べてきた東京の近郊に対し、京都の近郊「洛外」は市街同様重要な歴史遺産や有名社寺、古典文学に登場する場所が軒を連ねているといった状態である。さらに推測になるが、近代京都は東京と比較すると他地域からの人口流入も少なく、「新しい行楽地としての近郊」が形

成されたようにはみえない。これは人口だけではなく地形的なことも考慮しなければならぬ。

関東平野に位置する東京は市街地が拡大するにつれ、これまで行楽地であった近郊が消滅し、「新しい行楽地としての近郊」が作られていく。これに自然主義文学による「武蔵野」の讃美が重なり、独歩や花袋のいうところの雰囲気を漂わせる近郊は新都市教養人の行楽地として評価されていく。一方江戸以来の文人墨客の行楽地は次第に姿を消し再生産されることはほとんどなかったとみられる。

こうした新都市教養人の予備軍ともいえる一高生達が、東京の近郊に焦点を当てたのも当然の成り行きであつたろう。

おわりに

江戸・東京は行政の中心であると同時に観光地でもあった。近代東京において観光の対象になったのは都市機能が中心であり、歴史的遺産は従であった。東京が観光地であることは現在も同様であるが、近代以降現在に至るまでの間、観光の内容や対象には変化を生じており、それ自体重要な調査分析対象になってくるだろう。

本稿においては東京の案内書を軸として東京の観光について述べてきたが、東京の案内書は当然のことであるが、行政区画の改変、イベント開催時に多数出版されている。明治四年の大区小区制実施、同十年の第一回内国勸業博覧会、十四年の一五区制実施と第二回内国勸業博覧会、二十二年の東海道線開通と翌二十三年の第三回内国勸業博覧会、四十年の東京勸業博覧会などである。

首都東京は絶えず観光客が訪れている。もっとも仕事の関係で上京しついでに東京を見て回るというパターンも「観光客」とすれば、観光客の中に占める割合はかなり高いものになるだろう。東京観光にかける日

数も近代前期と後期では変化を生じているようである。近代前期にはほとんどが短期滞在型であったとみられるが、後期には一〇日後の滞在も増加してきたようである。近代前期の東京見物は東国在住者が伊勢参宮などを兼ねて東京に立ち寄るケースが大半で、一泊程度の宿泊が一般的であった。さらに地方から東京に移り定住するもの、地方から東京の学校に入り下宿する学生が増加すると、これを頼って東京に滞在し見物をするようになったようである。

こうした観光客を対象に東京案内は出版されたが、明治二十年代の後半頃から東京在住者のための行楽案内が出版されるようになってくる。一つは掃苔録や江戸史跡を巡るもので、趣味人というか近世的文人墨客が好みそうなものであり、いま一つが東京近郊案内である。特に東京近郊案内は大正期に入ると東京案内の主流を占めるようになってくるが、これは新都市教養人によって支持されたものである。東京近郊案内はさらにその範囲を拡大し、東京住民が数泊で遊びに行ける案内書、夏休みの旅行のためへの案内書へとつながっていく。ハイキングや大衆的な登山案内もまたこうした流れの中に位置付けられるだろう。

史料の関係もあり十分な実証作業もせずに論じた部分が多いことは十分に承知しているが、以上述べてきたことについては実証が不可能な部分もかなりある。しかしそれを排除しては巨視的な見通しを立てることができないため、不十分なままではあるが発表した次第であり、実証すべき点は実証するのが、今後筆者に課せられた課題である。

案内書の内容の具体的な分析もほとんど行っていないが、今後内容分析をすることにより、観光の対象の変化や近郊の行楽の定着と小中学校等における遠足の関係なども明らかにすることができるだろう。また文学の面からの考察についても充実させる必要があることも痛感している。

註

- (1) 近代東京を観光地としてみる研究は極めて少ないが、鈴木章生「維新时期における東京新名所の成立について」(『立正史学』七七号 平7)は旅宿刈豆屋が引札として発行した江戸期と明治期の「〔從馬喰町 名所方角略絵図〕」(『東京見物 名所方角略絵図』)を比較検討して東京新名所を分析するなど、綿密な研究を行っている。
- (2) 国立国会図書館整理部編『国立国会図書館蔵明治期刊行図書目録』地理の部(昭46) 国立国会図書館
- (3) 東京都編『東京市史稿』市街篇57(昭40) 東京都発行に収録されている。
- (4) 富岡貴林編『〔改〕東京町鑑〕』(明7) 山本正兵衛刊
- (5) 『東京区分町鑑』 出年不明、明治七年の序がある。紅林堂
- (6) 条野探菊編『東京新町鑑』(明7) 日報社
- (7) 井上道甫編『東京一覽』(明8)『東京市史稿』市街篇56に収録されている。
- (8) 前掲『東京市史稿』市街篇56の注記には「刊行セラレシハ八年二月ナレド、天皇皇后ノ御齡算等、スベテ七年六月現在ト記セルヲ以テ、ココニ(明治七年六月の項を指す)掲ゲテ、当時ノ東京ノ景況ヲ示ス」とある。
- (9) 寺門静軒著『江戸繁昌記』全五篇 天保3〜天保7
- (10) 服部誠一著『東京新繁昌記』六冊(明7〜9) 山城屋政吉
- (11) 高見沢茂著『〔東京〕開化繁盛誌〕』四冊(明7) 天籟書屋
- (12) 岡部啓五郎著、大沢南谷画『東京名所図会』二冊(明10) 丸屋善七
- (13) 服部誠一著『東京新繁昌記』(大14) 聚芳閣
- (14) 松本平吉編刊『〔改〕区分町鑑〕』(明9) (龍溪書舎編集部編『近代日本地誌叢書』東京編1(平4) 所収
- (15) 拙稿『諸国人にとつての江戸―社寺参詣者を中心として―』(『国立歴史民俗博物館研究報告』14 昭62)
- (16) 同好史談会編『漫談明治初年』(昭2) 春陽堂
- (17) 東京都編『東京市史稿』(昭18) 東京都
- (18) 中山泰昌編『〔新聞〕明治編年史〕』四卷(昭9) 明治編年史頒布会
- (19) 註(15)に同じ
- (20) 註(18)に同じ
- (21) 註(18)に同じ
- (22) 『風俗画報』15(明23・4)
- (23) 台東区役所編・発行『台東区史』社会文化編(昭41)
- (24) 前田愛著『幻景の明治』朝日選書21(昭53) 朝日新聞
- (25) 東京都編・発行『東京市史稿』市街篇79(昭63)
- (26) 『風俗画報』360(明40・3)・361(明40・4)・363(明40・5)・365(明40・6)・367(明40・7)
- (27) 『風俗画報』360
- (28) 『風俗画報』361
- (29) 閉会式の状況は『風俗画報』369に収録されている。
- (30) 東京都公文書館編『東京都の修史事業』都市紀要27(昭55) 東京都情報連絡室
- (31) 情報公開部都民情報課(執筆担当は菊池昭) 坪谷善四郎(水哉)は旅行家でもあり、以下のような旅行案内書を出版している。
『日本漫遊案内』上(明36) 博文館
『日本漫遊案内』下(明38) 博文館
『世界漫遊案内』(明42) 博文館
- (32) 『東京案内』上下は昭和42年に明治文献より復刻されたが、朝倉治彦による『東京案内』解説が別刷で添付されている。
- (33) 生方敏郎著『東京初上り』現代ユウモア全集5(昭3) 現代ユウモア全集刊行会 本書は生方の作品を収めたもので「東京初上り」は第一部小説に収録されている。
- (34) 田唐伝三著『新東京俺らが見物』(昭5) 交蘭社
- (35) 受験学会編『最新東京遊学案内』(明38) 東草堂
- (36) 酒井勉著『明治廿八年男東京遊学案内』(明38) 東京修学堂書店
- (37) 鍋木清方著、山田肇編『随筆集明治の東京』岩波文庫(平元)
- (38) 野崎左文編『日本名勝地誌』博文館 本書は全一二冊からなり、第一編畿内之部は明治26年に、第二編台湾之部は同34年に出版されている。
- (39) 田山花袋編『新撰名勝地誌』全一二巻 博文館 巻一畿内は明治45年発行
- (40) 田山花袋著『東京の近郊』(大5) 実業之日本社 本書は大正9年に『〔日二〕東京の近郊〕と題して磯部甲陽堂から再刊されている。
- (41) 田山花袋著『一日の行楽』(大7) 博文館
- (42) 田山花袋著『〔東京〕一日の行楽〕』(大12) 博文館 本書は『一日の行楽』を増補したものである。
- (43) 徳富健次郎著『自然と人生』(明33) 民友社
- (44) 田山花袋著『東京の三十年』(大6) 博文館
- (45) 田山花袋著『東京近郊一日の行楽』現代教養文庫(平3) 本書は『〔東京〕一日の行楽〕』と『東京の近郊』から「東京」を中心にして抄出したものである。
- (46) 西田直二郎・魚澄総五郎著『〔修学〕京都史蹟案内〕』(大6) 発行者京都帝国大学々友会専務幹事山本良吉 発行所宝文館 なお表紙には文学博士三浦周行監修 文学士西田直次郎・文学士魚澄惣五郎編纂とある。惣は原本のママ。
- (47) 西田直二郎・魚澄総五郎著『〔修学〕京都史蹟案内〕』(大9) 発行者京都帝国大学々友会専務幹事鈴木信太郎 発行所宝文館 表紙に大正六年版のような記載は無い。

- (48) 西田直二郎・魚澄総五郎著『修学旅行京都史蹟案内』(昭8) 発行者京都帝国大学々友会専務幹事大野熊雄 発行人京都書籍 表紙には京都帝国大学学友会編とある。
- (49) 京都府師範学校校友会編纂『京都之古今』(大2) 河合文港堂
- (50) 長沢規矩也著『史蹟を探索する人々』(大12) 黎明社 本文においても触れたが長沢規矩也は一高史談会編輯代表者として著者になっている。
- (51) 一高史談会編『東京近郊史蹟案内』(昭2) 古今書院
- (52) 長沢規矩也著『史蹟を探索する一日の旅』(大14) 発行人東文堂 発売所崇文堂
- (53) 註(51)に同じ。
- (54) 一高史談会著『大東京史蹟案内』(昭7) 発行人育英書院 発売所目黒書店

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

(二〇〇二年四月二十二日受理、二〇〇二年十月十一日審査終了)

Tokyo as a Tourist City

YAMAMOTO Mitsumasa

This paper addresses sightseeing in Tokyo and excursions by the people of Tokyo in the Meiji and Taisho periods. From the time Tokyo was known as Edo right up to the present, the city has always had a role as a tourist city and has attracted many visitors. In conducting a study on this subject, this paper used as its main source material guidebooks of Tokyo.

In the Meiji period, there were several peaks in the publication of Tokyo guidebooks. The major peaks were in 1871 and 1878 when there were changes in administrative districts, in 1889 when the Japan National Railroad's Tokaido line went into full service, and the following year 1890 when the Third National Industrial Exhibition was held in Tokyo. Not too many guidebooks were published in 1907 when the Tokyo Industrial Exhibition was held, but the city of Tokyo published its "*Tokyo Annai* (Tokyo guidebook)" in two volumes and the portable "*Tokyo Yuuran Annai* (Tokyo sightseeing guidebook)".

The publication of guidebooks due to changes in administrative districts was not related to an increase in tourists; guidebooks were published at the time of industrial exhibitions in anticipation of a temporary influx of tourists. Although the number of tourists visiting Tokyo would have increased yearly if there had not been any special event, these exhibitions provided publicity as to the actual state of Tokyo to wide areas and promoted an increase in tourists during normal times. In addition, it is thought that the start of service of the Tokaido line led to the increase in tourists from areas west of Tokyo.

Towards the end of the Meiji period, there also seems to be an increase in tourists who stayed in Tokyo for about a week. This was because tourists could by then stay with relatives who had moved to Tokyo from the provinces and had settled down there or with children who lived and studied in Tokyo.

Starting around the early 1900s, guidebooks on places to visit for people living in Tokyo were also published. Locations for excursions dating back to the Edo period continued to be used in modern times, but their number decreased as some disappeared or lost their value as places to visit due to urban development. People who had come from the provinces and settled in Tokyo also used the traditional excursion spots from the Edo period, but started also to look for new places to visit. It was during these times that KUNIKIDA Doppo's "*Musashino*" was published and OMACHI Keigetsu wrote his "*Tokyo Yugyoki* (Record of travels in Tokyo)".

In the Taisho period, TAYAMA Katai published "*Tokyo no Kinko* (Suburbs of Tokyo)" and "*Ichinichi no Koraku* (One-day excursion)," and the area around the western part of Tokyo came to be well known as "*Musashino*" and

developed into a place to visit on excursions. As if to compete against the sightseeing spots created by the writers and artists (intellectuals) of the Edo period, the new generation of intellectuals created in their turn new places to visit.